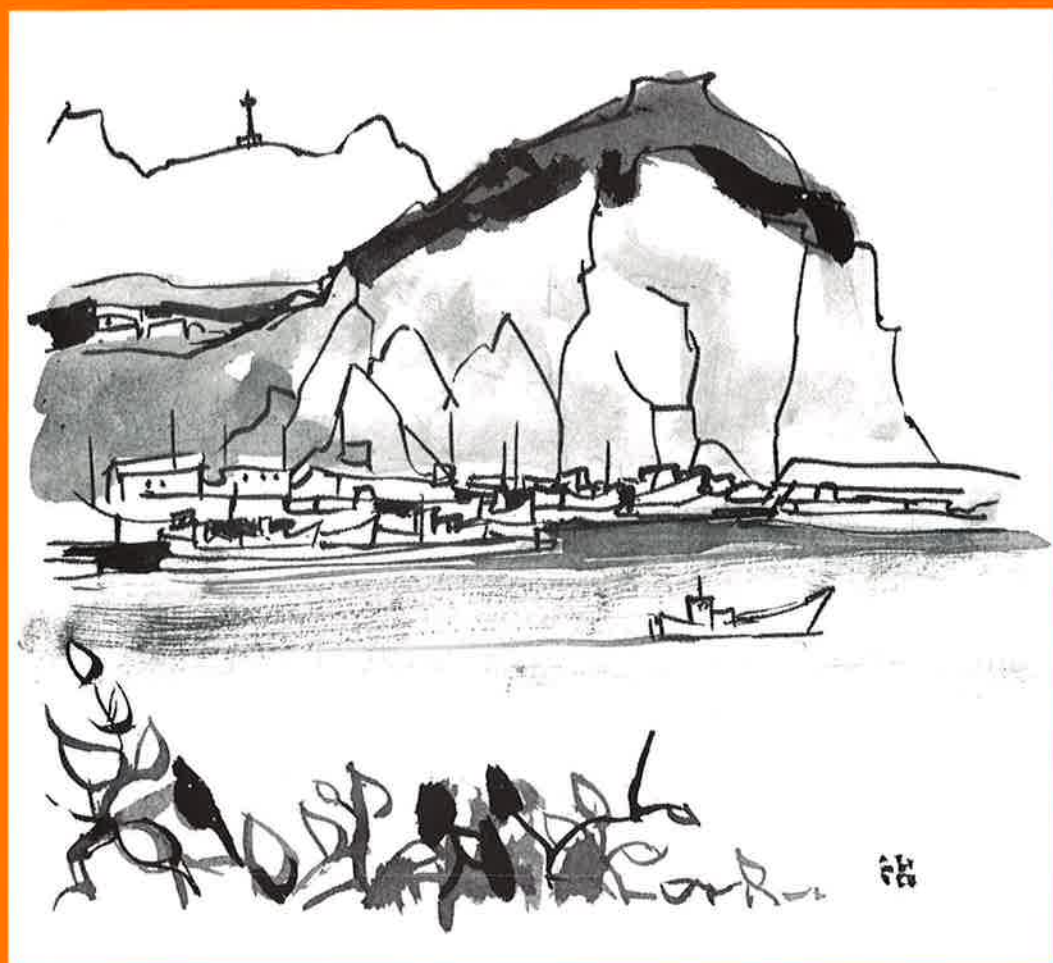


波と鳥

第 9 号 1988



室蘭市医師親交会誌

波ノ鳥

第 9 号 1 9 8 8

室蘭市医師親交会誌

目次

表紙 モトマリ・カジカ岩 加藤 治良
カッター 竹内 隆一

測量山 高田 芳朗

東 栄先生の長寿と永年のご活躍を讃える会のこと 大岩 昌生 1

長田 廣・高橋 清蔵・小國 親久

奥州かくれキリシタン考 竹内 隆一 2

脳死は果たして個体死か 高橋 陽夫 7

音楽の散歩道
――架空対談――孔子様と音楽を語る..... 安斎 哲郎 11

座談会
.....「海と山と空と、遊ぶ心と」..... 14

鈴木 健弘 斉藤 修弥 加藤 治良
神島 茂夫 斉藤 光史 他編集委員

大正っ子物語「時の点鬼簿」から..... 加藤 治良 20

親交会創立三十五周年記念旅行 香港・マカオの旅 23

記念旅行 事の次第 大岩 昌生

香港あれこれ 上田 智夫

香港旅行 丸田 浩

しゃしん記 青木 茂

あんらくいす

..... 33

平凡なる平均的開業医の軌跡 曾根 清孝

天和のこと 鴨井 清成

韓國研修旅行および中國旅行記 安立かほり

昭和63年親交会旅行 ニセコ・積丹方面 37

幹事の弁 斉藤 修弥

ゴルフ・コンペ 石川 秀人

編集室へのお便り

..... 40

会員異動

編集後記 青木 茂 43

測量山

高田芳朗

大して自慢にはならないが、目をつぶっても、測量山の山腹の家並みを、どの方向からでも正確に描けるようになった。

いろんな風景を描いて来たが、不思議なもので、測量山を描いているときに、恋人と一緒にいるときのように浮きうきし、また気持も休まる。

編集委員のK先生、S先生から何か描くように頼まれた。「何を描いたらよいか？」と聞いたら、即座に「測量山がよい」と云われた。今回もまた、心浮きうきしながらこれを描いた。

測量山は、四季折りおりに風情があるが、冬は淋しく秋はもの憂い。やはり初夏といわれる頃が一番美しいのではなからうか。



東 栄先生の長寿と永年の

一、活躍を讃える会のこと

大 岩 昌 生

東先生が約半世紀に汎る医院開業に終止符を打たれる決意をされ、今年3月をもって閉院致されました。今後は赤十字血液センター勤務に専念される事になります。先生の、室蘭市医師会、医師親交会、また地域社会に対するご活躍は皆さんのよく知る所であり、加えて私達後輩に面倒見のよい事で大変敬服致して居りました。この度の事を契機にして、一度ご苦勞さんでした会をやろうと言う声が誰からともなく出て来まして、何人かで相談しましたが、先生は大げさな事は余り好まぬと思うから、日頃交流の深かった者が集まり、先生の八十五才の誕生日を期して、飲み屋でも乾杯しようかと話が始まったのです。所がこの話が伝わりその申込みの多くなつた事、私達が考えていた何倍もの数になり、五十名を越すパーティーになりました。これ先生の人柄と普段の交流の広さによるものと全く感服の極みであります。

五月十八日、午後六時三十分より輪西町ニュー・ジャパンにて記念撮影を済ませ、白鳥の間にて賑やかに開催された会の模様を寸描致しますと、先ず飯島先生の司会で発起人代表 原田一洋、医師会有志代表 上田智夫、親交会有志代表 大岩昌生の各氏よりお祝いの言葉があり、記念品と花束贈呈は市民代表のママさん達によって行われました。続いて、東先生より戦中戦後の苦しい時代の思い出をはさんで、会員と共に歩んで来た五十年の歴史

を語り謝辞を述べられました。参加者一同は東先生が折にふれて語られた、十数年前にご他界された亡き奥様の内助のご功績を想起しながら、誠に感銘深く拝聴いたしました。

次いで遠方より祝辞祝電が届き、黒光先生によって披露されましたが次の通りです。

祝辞 千葉県市川 長田 廣 様

祝電 千葉県千倉 高橋 清蔵 様

稚内 小國 親久 様

飛騨高山旅先にて 本庄 晋一 様

室蘭市知利別町 高田 芳朗 様

東京赤坂 北川 凉子 様 (花束共)

さて祝宴に入ります。佐藤善弘先生の発声で高らかにおめでとうの唱和と盛んな拍手で始まりました。開宴間もなく各先生方のスピーチを戴きましたが、俺にも一言云わせて呉れと次から次へ続き、皆様ウィットに富んだ熱弁で拍手は鳴り止まず、大変な盛り上がりです。カラオケ出演も今迄にない盛況で、真先にダンスを始めたのは外ならぬ主賓東先生でありました。若々しい身のこなしはとても八十五才とは見えず、まさに万年青年の言葉がびつたりです。

予定の時刻はとうに過ぎ、大きな余韻を残しながら安齋先生の音頭で終宴の乾杯となりました。

それからが大変で、東先生は今夜接待に出た女性達の店を全部廻ってお礼を述べると言うのです。私は四軒ばかりでダウンしましたが、十数軒のお供をした黒光先生、飯島先生ご苦勞様でした。東先生のタフネス振りは感服を通り越して驚異に価するもので、今後この元気を失う事なく、私達の為に永く力を発揮して戴きたいと願うものであります。

(終り)

貴医師会益々御隆昌の段お慶び申しあげます。

祝賀会の写真御寄贈に預かり御礼申しあげます。おめでたい事でした。

お蔭様にて東先生の元氣な姿に接する事が出来、又皆様の御様子もそれと知られ懐旧の念一入です。

貴医師会の発展と、各位の御幸福を祈念致しまして御礼の言葉と致します。

長 田 廣

早や六月となり初夏の季節を迎えました。

去る五月十八日東先生の誕生日を卜して「先生の長寿と永年の御活躍を讀める会」を催され多数の先生達の御出席の下、盛会裡に目出度く終了されました先生の御喜びは勿論、医師会員各位の御満悦の程如何ばかりかと遙か遠隔の地より推察申し上げます。

心ばかりの祝電を差上げました処、早速、東先生より御丁寧な御礼の御便りを頂きました上に医師会からまで御礼の御手紙と記念写真を郵送下さって却って恐縮に存じ、有難く受取りなつかしく拝見して居ります。二十六年間の歳月が経過した今日、医師会員の顔触れの大半が変わって居られ、存じあげるなつかしい先生達は僅か十名位で今更ながら自分の老令に苦笑して居ります。医師親交会雑誌「波久鳥」に掲載予定の当日の祝宴の模様を拝読するのを楽しみにして居ります。

これからも東先生の御長寿と御活躍の継続と医師会の御発展、団結の強化を衷心より祈念して一筆受取の御礼を申し上げます。

高 橋 清 蔵

拝復

過日の東栄先生の御誕生を始めとする諸々の祝賀会記念写真、また過分のお言葉をお送りいただきまして却って恐縮して居ります。懐かしいお顔を拝見し私も出席し得たかの感、切なるものがあります。

本当に有難う御座居ました。諸先生方に宜しくお伝え下さいますようお願い申し上げます。医師会のご隆盛と皆様のご健康を祈り上げて居ります。

私
雑事に悩まされ乍らも元氣で居ります。

諸先生のご来遊を期待して居ります。

小 國 親 久

奥州かくれキリシタン考

竹 内 隆 一

大正十五年の春、私は一友と共に攝州高槻在（筆者註・かつてのキリシタン大名、高山右近大夫の所領）の一村落を歩いていた。重い雨で丘、谿の湿った中に梅、桃の花が咲いていた。そこは近年天主教の遺物が発見せられたる土地であった。

我々を案内してくれた一青年が問わず語りに聞かせてくれたところによると……………

その郷土には近頃まで他と交際を断った一部落の人々があつた。彼らは他と異りたる神にぬかずく。その信仰は極めて堅い。そしてひそかに彼らの信仰をうかがった人に尋ねると、彼らの祭るものは牛疫よけの神であつたという。

かの熱血僧フランシスコ・シヤビエルがもたらしたデウスの教が近畿の辺邑に神となつたというは真であるか。然しそれは

必ずしも滑稽な事ではない。内容は忘れられた。信仰とキュルト（札押）と勤行とは残った。

ここに人間の宗教というものの本相を暗示するものは無いであらうか。殊に人間性に深く根を張ったカトリック教、そのうちでも更に生（いき）の強いジェズイト教が頭をくだかれた鰻のやうに動く姿をわれ人は見ないのであるか。（木下李太郎）

私の父は農林省の技師でしたが早く亡くなったので少年時代の大半を秋田市の祖母の家で過しました。祖母は秋田佐竹藩士の出でその旧い家屋敷は旧藩時代のまま残っておりました。附近一帯は内町と呼ばれ、傾きかけた武家屋敷が時代からとり残されたやうに点在しております。映画監督黒澤明さんの生家も道一つ隔てたところにあつて、弟の洋君とは中学の同級生だったので互に行き来しておりました。彼の家は壁など大分落ちてはおりましたが、佐竹二十万石の家臣のうちでも大身であつたことをうかがわせる門構えでした。

祖母の家は祿高二百石、中級の藩士でした。その家の模様ですが、玄関を入ると正面に格子窓のついた仲間部屋があります。その隣には大きな土間があつて間を頑丈につくられた分厚いひらき戸が隔てております。大きな土間の正面は居間で、右手が座敷の控えの間、左手は台所に通じております。

敷地は五百坪位ありました。前庭の築山には氏神を祭る祠があり、母屋の裏には武具などを格納する倉がありました。

祖母は語部のような存在でした。非常に信心深くお寺参りは勿論のこと代々伝承した仕来りは厳重に守つておりました。毎月の朔日と氏神のお祭りの日には祠に幟を立てます。赤い幟は淡島さんの日でした。小さい鳥居をくぐつて御参りをし、お神酒とお供えを欠かしません。その日は家族そろつて赤飯で祝います。居間

の正面には大きな佛壇、先祖代々の位牌、その上には神棚があります。

ところがここに少年の心にも不思議に思われたことは、もう一つ違う神様を祭る棚が玄関の大きな土間の人目につかない鴨居の上にあつたことでした。それは大麥煤けておりました。その正面には和紙に刷つた牛の版画と思われるものがはられており、その奥は見えません。それはお牛様と呼ばれておりました。お牛様のお祭りは毎年一度、旧暦霜月の二十五日、祖母だけがひっそりと拝みます。それも氏神を拝んだあとからです。この日お祝はありませんでした。

お牛様の祠の奥に何があつたのでしょうか、好奇心から家人の留守を見はからつて梯子をかけて覗いてみたこともありましたがただ薄暗いだけで何も見えません。或いは十字架が彫つてあつたのでしょうか、私がこのやうな空想（いや、妄想かも知れませんが）をするのは最近木下李太郎の日本キリシタン史とキリシタンの末路を読んで、少年の日の幻が思い起されたからに他なりません。

長崎の浦上はかくれキリシタンの里として知られております。世が慶応と改つて、キリシタン禁令のややゆるんだ頃のある日、新築の「二十六人の殉教者のお寺」の入口に集つた男女兒童うちつれた十四、五人の人々がありません。

再び李太郎にもどりますと

それは唯の好奇心で来たものとは見えなかつた。その時五、六十才ばかりなる女がプチジャン師の近くに來て跪いて、その手をおき低い声でいった。「ここなわたくしどもは貴方と同じでございます」「わたくしどもは皆浦上の者です。浦上では大抵の人がわたくしどもと同じ心でございます」

その女の人が直ぐまたこう尋ねた

「サンタマリアの御像はどこですか」この名を聞いてプチジャン師はもはや疑うところはなかった。是こそ日本古キリスト教徒の裔である。

「ほんとに、これこそサンタマリア様です」彼等がいった。「ごらんない腕に御子エズス様を抱いていらっしやいます」彼等は又いった。「霜月の二十五日には御主エズスさまの御祭を致します。その日の真夜中にエズスさまはお生れになり、それから貧困のうちに御成人になられました。三十二の御歳には、わたくしどもの魂の救いのために十字架にておかくれになりました。只今はちやうど悲しみの節でございます。あなた様もその儀式をお守りになりますか」

これが日本における古キリシタン教徒発見の有様である。

奥羽地方のキリシタン

一五四九年シャビエル上人が日本に来た頃、当時の民衆がうすうすに海のあなたに勢よくさかんな文華の国のあることを感知したことは確かでありましょうし、また、形式と神秘とに入って何ら清新な道徳的感情を与うることを知らなかつた佛教の代りに、深淵とした文化的感情と結合したヤソ教の宗教的道徳が一般民衆に喜び迎えられたのは事実だったのでしょう。

しかし度重なる禁教令と信徒の処刑により、また寛永十五年（一六三八年）に至って天草一揆の事が勃発しました。以後ヤソ教は衰微の極に達したのでした。

李太郎によれば

奥州地方のキリシタン史は史実の伝はること甚だ稀薄で、支倉六右エ門らの欧州旅行について書かれたラテン語によるヨーロッパの文献によるより仕方がない。

欧文文献の一つに「一六一四年刊行の『日本に於ける最強国の一

つなる奥州国の王、伊達政宗のキリスト教を弘むべき布告をば其の国中にふれ出したる事、並にセビヤ生れのパドレ（筆者註、バテレン）フライ・ルイス・ソテロと共にエスパニヤに遣はされたる其の使節の事に関する短き概略の物語」なる小冊子がある。

このとき正使支倉六右エ門並にフライ・ルイス・ソテロ、通辨、羅馬人学士ドットオル・シピオネ・アマチであつた。

一六一三年の十月二十八日乗船、牡鹿郡月浦より発す。南蛮人四十人余り、都合百八十余人、先ず太平洋を横断しヌラブア・スパニア（メキシコ）アカプルコ港を目指した。

この黒船は横五間半、縦十八間、高さ十四間一尺五寸、帆柱十六間三尺松の木なりとある。

このドットオル・シピオネ・アマチは日本使節の通詞且つ事務官であつた。一行と共にローマに入り奥州記を作つた。

奥州記の大意は、奥州王伊達政宗の勢威、政宗がキリスト教を理解し、キリスト教の布教を認め、キリシタン教徒の増加したと、六右エ門、ソテロが正使となつたスパニヤ、ローマに到るべき使節派遣の次第などが詳細に述べられている。

また日本キリシタン貴族の間の不和により迫害の起つた事、一方では將軍の江戸にて行いたる迫害、二十八人の日本キリシタンの立派な殉教のことにも及んでいる。

当時仙台には二つのヤソ教の寺院があり、その他秋田の南部および仙北郡にも各一つの寺院があつて、いずれも其の地の信徒が建てたものであることが明記されている。

木下李太郎（太田正雄先生）について

昭和五十八年五月二十二日東北大学医学部構内その前庭の木立の中に、医学部百年記念事業の一つとして木下李太郎の詩碑が建てられ、除幕式が行われました。彼の美しい詩情が秘やかにそ

ここに眠っております。

最近その全集二十五巻が岩波より刊行されて、李太郎を非常に身近にあつて読むことが出来るようになりました。

医学者としての太田正雄先生は東京大学医学部を明治四十四年卒業、皮膚科学教室に入り土肥慶藏先生に師事、大正五年南滿洲医学堂（後の滿洲医科大学）教授、大正十年フランスに留学、サブロー教授のもとでランジュロン博士と共に真菌分類に関する新しい方法を發表されました。その後、愛知医科大学教授（現在の名大）を経て大正十五年より約十二年間東北大学教授、昭和十二年より東大教授、停年の年昭和二十年に胃癌でなくなりました。その間従事された黴菌の培養、現在も太田母斑として世界の臨床医に知られている褐青色母斑の研究は余りにも有名です。その生涯の師は医学では土肥慶藏、文学では森鷗外でありました。私事にわたりますが、私の中学校の時代から高等学校を通して（いや、心の底では現在もそうなんでありますが）私にとつての木下李太郎は永遠の星でありました。それで医学部は仙台を受験したのですが、入学してみると入れかわりに東大に去られたあとでした。このとき学生による留任運動のあったことが語りつがれております。

太田先生は木下李太郎の筆名によって早くから知られた詩人であり劇作家であり美術の評論家でありました。以下、李太郎研究家新田義之氏、野田宇太郎氏の述べるところを引用して、その巨像の一端にふれてみたいと思います。

その初期エキゾチスムの時代（明治の終り）には北原白秋、吉井勇、高村光太郎、永井荷風、石川啄木らと共に新しい文芸運動を起した人であり、パンの会、屋上庭園などでその中心的な活動をした人であります。詩集「食後の唄」の詩人として、また戯曲「和泉屋染物店」、「南蛮寺門前」などの作家として高名であり、

近代詩の流れにおいては白秋と共に近代象徴詩の展開を試みております。その流れは三木露風や萩原朔太郎といった大正の象徴詩へと受けつがれて行きます。

初期のエキゾチスムは先生が満洲に行かれる頃まで続きます。満洲時代にエキゾチスムの芸術感情から脱却して歴史的なものを見る態度を獲得されました。この時期に太田先生の目は言語の上よりは、より多く造形美術の上に注がれました。

そして従来の狭い日本趣味を脱して、中央様式としてのインド文化と中国文化を認め、その波動たる地方様式として日本文化を位置づけようとしたのでした。

ユマニスト太田

太田先生の云われるユマニストとは古典を尊重する人の意でアメリカでいう人道主義、白樺一派の人道主義というものとは余程異つたものであります（新田義之）。

大正九年七月南滿医学堂をやめられた先生はアメリカ経由でヨーロッパに渡られます。先生はフランスに於て、その文化の基盤がユマニスムの精神の上に築かれているのに気づかれました。

この洞察からふり返つて日本の文化を考えられたとき、そこには矢張りヨーロッパの古典であるギリシャ、ラテンの遺産や、その後の各時代の文化的記念碑に匹敵するものとして、古の中国の哲学や、我国の古事記、万葉から芭蕉に至るまでの諸々の古典が浮び上つて来たのでした。そしてこれらの古典に通ずる門の我々にまだ開かれていたことを改めて認識されたのでした。若き日のエキゾチスムは歴史主義を経て古典主義に到達して、古典を尊重しなければならぬとの意味が、人類文化の普遍的なあり方を考えた上で把握されたのです。

太田先生の真面目が發揮されるのは、大正十一年の「大同石仏寺」から始まり十五年の「支那南北記」、昭和四年の「えすばに

や・ぼるつがる記」十四年の「其国其俗の記」と連なって行く系列と、昭和十一年に刊行された「芸林間歩」二十一年の「葱南雜稿」などに収められている数多くの紀行、隨筆においてであつて、新田氏はそこで展開された散文藝術の世界を太田先生の諸作の中でも最も質が高いものと評価しております。また、まず抒情詩人として、詩的劇作家として天才をあらわし、後に数多くの珠玉の如き隨筆を残したオーストリアのフーゴー・フォン・ホフマンスタールは太田先生が特に愛読された作家ですが、太田先生御自身の文学者としての御仕事は、ホフマンスタールのそれに傾向としてよく似ており、内容的質的に見ていさかも劣るところは無いと思われると賞讃しております。

太田先生と南蛮キリシタン学

この分野での研究は大正十三年にはじまります。先生がキリシタン研究を始められた動機の一つとしてヨーロッパ文化に始めて接した人達の心の動きに対しての興味と同情があつたことは間違ひありません。

ヨーロッパ滞在の終りに近い頃、スペインとポルトガルに旅行し、其の地の図書館で十六世紀のイエズス会士の日本布教にはじまるキリシタンの歴史に関する文献をさがし、日本で手に入らないものは筆写して持ち帰られました。コピーの不便であつた当時のこととて、どんなに多くの労力を忍んで研究がなされねばならなかつたか、痛切にその労がしのべれます。この南蛮キリシタン学にはすぐれた資質のほかラテン及び西欧の数か国語で書かれた文献を読解するのに足る語学力が要求されます。

仙台は支倉六右エ門が生れた所であり、ローマに派遣され謎の帰国を遂げ、謎のまま生涯を終えた土地であります。帰国後の一切の歴史的記録は消滅しております。太田先生は仙台に行つたら必ずやそれを調べる大きな手掛りを掴めるかも知れないという情

熱とキリシタン学者としての探求心を燃やして東北大学に赴任されたことでありましょう。

終りに、太田先生のなくなられる一年ほど前にお書きになつた「古典について」の中から次の一文を引いて、これに新田義之氏の言葉をそえて拙稿を終わります。

「古典を解するにはなを交響樂を聴くが如くである。伴奏の無い歌唱は鼓舞する所が狭い。日本の古典を歌唱に較べると、それは支那古典を伴奏せしむることによって更にその影響を大きくする。然し今の時代はその伴奏のうちに泰西の古典、現代の思想、科学、技術等の器を吹弾する者をも容れることを要求する。

そして世人は、この大交響樂の大指揮者を翹望しているのである。」

私はこのように先生が終生、ロオマン的な夢と、古典主義的なきびしさをあわせ持たれた方であられたのを床しく思うのであります。

引用文献

木下李太郎全集 (岩波 昭和五十八年版) 主として第十三卷、第十四卷より

新田義之 太田先生と古典の世界 李太郎記念館シリーズ六号 (一九七四)

野田宇太郎 詩人・李太郎の世界 李太郎記念館シリーズ十五号 (一九八四)

櫻井 実 艮陵の教授たち (東北大学における医学教育の源流) (金原出版 昭和六十一年)

脳死は果たして個体死か

高橋 陽 夫

教授―君い、脳死の場合はね、心臓が動いていても死体なんだよ。学術専門団体でもある日本医師会の会長が宣言しているんだからね。そのくらいのこと理解できないのかね。理解できないなら小学校一年生から勉強やり直してくるんだね。

学生（一寸ショック気味で沈黙考）―心臓が動いていればその人間は生きている、止まっていれば死んでいると思っていだし、今でもそう信じている。動は生、静は死、また有は生、無は死であるとも、かつて哲学の教授から教えられたんだが、その思想は今日では通用しなくなったのだろうか。どうしても理解できない。息苦しい。脳を切替^{あたま}えなければ理解できないのかもしれない。洗脳かな。教授は若い世代に生まれている。矢張り老いては子に従えか。時代が変れば物の見方考え方がこんなにも変わるものなのかなあ。

教授―君い、問題は人命救助なんだ。人助けになるんだ。そんなに心拍にこだわらずにすなおに割切ることだね。

学生（一寸不満そうに考える）―そうかなあ。こだわりを捨てて何事も割切れか。ふと目が覚める。なあんだ今のは夢だったのか。

死ぬということは、心拍が完全に不可逆的且つ永久に停止すること、すなわち全血流が完全に不可逆的且つ永久に停止することである。すなわち人体は血流が有れば生きていますし、無ければ死んでいる。心臓が動いていれば生であり静止していれば死である。

心臓は脳との神経連絡が遮断されても、特有の自動能と体液性の調節によって、情緒的拍動はできないが、基本的拍動は可能である。この可能性によって、心臓は脳死判定後、結局は酸欠によって停止するのであるが、数日間拍動を続けることができるのである。

人体は、部品（臓器）交換不能、一台（人）限りの巧妙な人間機械である。部品脳が止まっても（脳死）部品心臓が動いている間、人間機械は運転して（生きて）いる。部品心臓が止まればこの時はじめて人間機械は止まる。これが人間機械、すなわち個体（人）の死である。人の体は脳が止まっても首から下は、頭蓋骨を包む皮膚と筋肉を含めて、なお生き続けているのである。死ぬということは脳が止まることではなく心臓が止まることである。

脳死問題で最も重要な課題はなんといっても脳死と個体死との因果関係であろう。今回六十二年一月十五日発表の、日医生命倫理懇談会の「脳死および臓器移植についての最終報告」は、昨六十二年三月二十五日発表の中間報告と同じ見解「脳死をもって個体死と認めてよい」を繰返しているだけで、脳死がなぜ個体死なのかその基礎理由は相変わらず明示されていない。ただ、日医生命倫理懇談会―答申―理事会審議―答申内容をそのまま日医の意見とすることを全会一致で決定しこの旨全国都道府県医師会に通知という一連の形式を採ったことだけが、前回の中間報告との相違である。全国医師会会員のいくばくが日医の意見「脳死をもって個体死と認めてよい」に同意したか、またこの通知が下部会員にどの程度周知徹底されたかはあえて問わない。もちろんこの通知はわれわれ地方医師会会員には届いていない。医師会上層部だけの了承かもしれない。全く期待外れだった。

「現代の法医学」は、個体死（個人の死）の臨床上の判定基準を次のように教えている。

① 中枢神経機能停止の症状

② 循環停止の症状

③ 呼吸停止の症状

右の三症状が十五〜三十分持続すると、死と判定することができるとしている。すなわち症状の①と③を合せたものが脳死の症状であり、これに更に症状②を加えたものが三十分経過すると個体死になるということである。個体死になって更に三十分くらい経過するとすでに幽かに、一時間以上経過すると明瞭に、真死の徴候である死斑が現れてくる。すなわち死斑が認められると個体の死は真死と認定され、ここにはじめて死体解剖も、移植のための臓器摘出も法的に可能となるのである。すなわち人はまず死んでそれから死体になるのである。脳死はすでに述べた通り先の個体死判定基準の①と③の症状を満たしたものであり、個体死は①と②と③の症状を満たしたものである。すなわち

脳死＋心拍動＝前個体死＝生体

脳死＋心停止＝個体死＝死体

ということになる。日医は「脳死をもって個体死と認めてよい」と断定ではなく少し遠慮気味の答を出しているが、どんな計算をしたのか計算法が示されていない。計算法が示されていなければ外国思想をそのまま借用したのではと邪推される恐れがある。計算法が示されなければ国民の同意を得ることはますます難しくなるだろう。もちろん先の個体死判定基準の三症状が満たされなければ「脳死をもって個体死と認めてはいけない」ということになる。

脳死を表現する外国の言葉に

① a dead brain in a living body

② heart-beating cadavers

がある。cadaver は特に解剖用屍体を指す。表現①の脳死は現実

的存在で生体であることを示し、表現②の脳死は非現実的空想的妖怪的存在であって、心拍動のある個体屍とはさすがに妖怪である。いずれの脳死も移植用の生きた心臓を温存しているのが共通している。日医が脳死をもって個体死と認めたのは表現②の脳死である。したがって日医の個体死は非現実的存在の妖怪変化である。妖怪変化から摘出した心臓は妖怪変化の受容者にしか適用されない。移植医が必要とする心臓は、生体から取った生きた現実の心臓である。

われわれは現実の世界に存在するのであって非現実的夢想的世界に存在するのではない。生を死と認めること自体がすでに非現実的思考であり夢想であり空想である。日医は故意に表現①の脳死を表現②の脳死と誤認しているのかもしれない。

日医の見解「脳死をもって個体死と認めてよい」に対する国民の同意は未だに得られていない。それは真心をもって真実を説かないからだと思う。個体死のレッテルをはった脳死の缶詰を開けて見たら中味は生体であったでは、国民の合意を得ようにも得るすべなしである。信用の失墜である。「人を見て法を説け」という言葉があるが、内容が真実でなければいくら説いても国民はますますソップを向いてしまうであろう。もし便宜上脳死を個体死と認めるのであれば、便宜上の殺人行為となり罪はいよいよ重いと目下国会内に自民党医系議員を中心に「生命倫理研究議員連盟」なるものが設立され、超党派議員で脳死法なるものが画策されている。目的は、脳死の個体（人）を死体と認めるか、脳死が確定すれば生きた心臓摘出可能というところであろう。国民の洗脳不可能と見て取った窮余の一策であろうか。人命を法律によって規制することは反民主主義とでもいうべきだろう。憲法に保障された生きる権利は何によって守られるのだろうか。脳死法制定のあかつきには、国民は若し過って脳死という罪を犯せば、直ちに死刑

の判決が下り、即刻心摘出をもって刑が執行されることになる。国民は一種の社会不安の中に暮らすことになりかねないのである。医学に政治の介入は許されない。政治の干渉は医の本質を侵し、医学の權威を失墜させ、医学の歴史に汚点を残すことになる。

日医の最終報告を見ると脳死患者には、脳死判定時と六時間後の脳死確定時と心停止時と、死亡時刻が三つある。したがって楠正成の「七生報国」には遠く及ばないが、脳死患者には二度生れ変つて自分の心臓を人命救助に役立てる機会があることになる。

次に死亡時刻が三つもあつてその選択に迷う時は裁判所の決定を仰ぐことになっている。ついにながら脳死が生体か死体かも裁判所で決めてもらったかどうかと思うが、審理不能、医者のやるべきことと却下されるに決まっている。裁判所も商売とはいへ甚だ迷惑のことだと思う。

厚生省の脳死判定基準が発表されてから二年有半、この間同基準によつて判定された脳死患者に、時間の延長で自発呼吸が発現したとか、視床下部からホルモンの産生があつたとか、脳の一部に血液循環を認めたとか、新事実が相次いで発表されている。いずれも厚生省基準の脳死は脳の全機能が完全に停止していないことを証明するものである。したがって厚生省基準の脳死患者は個体死していないことになる。脳の一部が未だ生きているし、まして心拍があればなおさらのこと、厚生省脳死をもつて個体死と認めることは時期尚早である。したがって厚生省基準の脳死をあえて個体死と認めることは、無謀の見切発車という外はないであろう。なお最近各医科系大学と大型医療機関に倫理委員会なるものが乱立きみである。これは移植医から脳死容認の申請があれば書類審査で、その内容に不備がない限り容認の許可を与える私設のお役所的存在である。また移植医を援護する私設射撃場的存在でもある。しかし「脳死は個体死」が公認されない限り、日医の意見も倫理委員会の許可

も公的保証のない空手形でしかない。もちろん日医にも倫理委員会にも「脳死は個体死」を公定見解とする法的權威はない。

中央公論連載の評論家立花隆氏の日医最終報告に対する論評は、非専門家ながらなかなかきびしく、急所を突いて余すところがない。氏の著書「脳死」と共に生涯教育の読み物としては非一読の価値あるものと思うが、日医はこれを歓迎するかどうか。わが日医の学術専門団体はこれに対し、日医意見「脳死をもつて個体死と認めてもよい」の正当性を、堂々と天下に公表すべきであると思う。そうすることが国民の合意を得る唯一の道であり、またわれわれの大口に期待するところでもある。若し黙して語らないのであれば国民の不信はいよいよ募るばかりであろう。

去る六月十五日、厚生省と日本医師会合同の調査団が、臓器移植の現況調査かたがた脳死問題解決の鍵を求めてアメリカ大陸に渡つたが、成果といえは、ただ脳死立法に一層拍車をかけることになつただけであろう。「脳死をもつて個体死と認めてよい」の正当性を解明する鍵は遂に発見できなかったらしい。また術後の患者の運命についても何一つ調査はしなかったらしい。移植移植と移植にばかり心を奪われていたのでこの重要な調査は脳にはなかったのかも知れない。

自分の臓器は自分の臓器他人の臓器は他人の臓器、また自分の臓器は他人の臓器でもなく他人の臓器は自分の臓器でもない。したがって他人の臓器を自分の臓器にすることは御法度である。これは天の摂理であり、不動の鉄則、禁断の鉄則でもある。自他の区別が無ければ現世は乱世である。自他の区別があつてこそわれわれの秩序ある生活は保障されているのである。われわれの身体についてもまた同様である。神の意思による禁断の鉄則を破る者（受容者）は生命を失うことになる。これは移植医の責任である。自分の体は心拍のある間は自分のものであつて自分以外の他

の何者の所有物でもない。心拍が停止すれば自分の体はもはや単なる物体ではない。ここにはじめて所有権が自分以外の者に移ることになるのである。

移植臓器のいわゆる生着は融合でもなくまた癒着でもなく、木（自分の体）と竹（他人の臓器）との異物関係にあるから、むしろ接着というべきで必ず離脱する運命にある。したがって術後生存率何年は、接着期間何年と呼ぶべきである。要は何日ひつついていたかが問題である。

異物である他人の心臓を丸ごと移植された受容者は、体内に異物が存在する以上、一方では天与の異物排除作用（拒絶反応）を動員して抗異物闘争を続け、一方では拒絶反応抑制剤による医原性エイズ様症候群との苦渋の闘病を強いられることになる。更に術後管理に依って自由は束縛され、待望通りの野放し快活の生活が期待できるか甚だ疑問である。しかし受容者が「それでも俺は宣告余命の六カ月を生抜いたんだ」とあえて満足するのであれば何をか言わん。人にはそれぞれの生き方があるのである。

臓器移植は神の摂理に反する行為というよりはむしろ不合理の行為と言わざるを得ない。移植医は、いわゆる近代医学の進歩に驕ることなく、すなおに謙虚に臓器移植の不合理性を反省してみる機会があつても邪魔にはならないと思う。

「心拍こそ生の証」を本誌第五号に投稿してから丸四年になるが、脳死問題はいまだに未解決のままである。原因は生は生、死は死と真実を説かないからである。嘘も方便というが科学や真理には通用しない。嘘から誠は決して出て来ない。人を説くには誠をもつて為すべきと思う。誠をもつて説けば、科学者を含めて国民の合意を得ることは容易である。脳死法によって本当（生）を嘘（死）と法定するのであれば、もはや処置なし、匙を投げざるを得ない。

臓器移植は放火のようなものではなからうか、移植医自から火付け役を演じ、「付いた付いた」と自分は興味最高スリル満点だが、迷惑するのは患者である。近代消火器（医療）で懸命に消火に手をこれ尽すのであるが、小火では済まず、結局は大火消失（死亡）ということになるのである。合法的放火という行為はない。臓器移植は合理的でもなくまた合法的でもない。禁制の火遊びではなからうか。臓器移植はまた握手のようなものである。喜びも束の間、間もなく双方の手は離れてしまうのである。

最近、日本脳神経学会からもまた日本弁護士連合会からも、医師の意見に對し待ったがかかっている。医師の意見「脳死をもって個体死と認めてよい」は果たして本当（死）であろうか。

教授（学生の手を取って）——君い、脈が触れないね。

学生（驚いて）——先生、わたしは死んでいるんでしょうか。目が覚める。急いで脈を診る。確かに脈がある。おれは確かに生きているんだ。学生は喜色満面、安心したのであろう。

心拍のあるかぎり脳死をもって個体死と認めてはいけない。脳死の個体は生ある個体である。

（一九八八年八月二十日）



音楽の散歩道

—— 架空対談 ——

孔子様と音楽を語る

安 斎 哲 郎

とき 現代 ところ 不詳
登場人物 ◇孔子 ○安斎

○昨年僕は必要があつて四十数年ぶりに論語を読みました。僕が関係している日本オスラー協会の北海道支部総会で先生の「恕」と聖書の「愛」との比較研究を発表するためだったのですが、それはオスラー博士の講演集の中に論語を引用した部分があつて、毛唐でさえ読んでいる論語を東洋人の僕が知らぬとは口惜しいではないか、と思つたからなのです。読んでいるうちに、いつとはなしにいつもの癖で音楽関係の先生の考え方にも強い興味を覚え次第です。本誌の読者の大半は熟年実年紳士ですから、中学高校時代に否応なく漢文を勉強させられた記憶があり、僕も四書五経十八史略などなど、随分と勉強したかすかな記憶があります。しかし、強制されていやいや学ぶのと、自発的な興味で読むのでは大変な違いで、学生時代にあれほどまで精読した筈の論語の中に数々の驚きを発見しましたし、無味乾燥そのものだった論語が、先生を取りまく生き生きとした人間集団のドラマに見えてきました。僕の学生時代はなんと言つても戦争中でしたから、当時としてはかなり自由主義的気風の温存されていた僕の母校でも、さすがに歪められた儒教や神道を国民統制の手段に利用しようとする軍国主義の影響から完全には免れていなかったのだと思います。

はじめに伺います。先生にとって音楽とは一口に言つてどんなものでしょう。

◇一口で言うのはむづかしいが、第一、六芸の中でも第二にあげられるほど、君子の教養としては大切なものだよ。

○六芸は礼楽射御書数で、今で言えば英語数学国語理科社会、僕らの世代では英数国漢地歴物理化学教練と言うことになりますね。◇別に入学試験や科挙はまだ無かつたが、作法やしきたりに詳しいこと、音楽に堪能なこと、武術にすぐれ、馬や馬車を巧みに乗りこなし、文獻に精通して字もうまく、算数もできることが、紳士、とくに人の上に立つべき者の必要条件だったのだ。中でも礼と楽はとりわけ大事なのだが、当時の為政者どもはなかなかそれを理解せず、わしも苦労したのだ。

○先生の時代の音楽は楽譜も録音も残っていませんから、どんな構成でどんな音が鳴り響いたかを正確には知るよしもないのですが、僕は指揮者という役柄から楽譜を眺めながら無響の音を聴くという特技を多少とも身につけましたから、論語の中で音楽に関する先生の短評、コメントを読むだけで、のびやかな楽の音もなんとなく聞こえて来そうな感じがします。

◇のびやかとは限らないさ。わしは魯の楽官長に述べたことがある。「私は音楽をこのように考えています。：まず金管楽器に盛りあがるような演奏効果があらわれます。やがてつぎつぎと他の楽器がこれに参加して、渾然たる調和をかもし出します。しかもそれぞれのパートは、他によつて消されることなく、存分に生かされ、のびのびと展開している、これが完璧な音楽ではありませんか。〔子語魯大師樂日、樂其知可也。始作翕如也。從之純如也。皦如也。繹如也。以成。〕」とね。

○これはまさに現代の大交響曲にもそっくりあてはまるオーケストラ音楽の極意です。先生が音楽に関しては、失礼ながら感激音痴と言つてもよいほどの素直さで目の色を変えて鑑賞する癖をお

持ちだったことは、述而第七に出ていますね。「孔子は齊に滞在していたとき、大韶の曲を聴いて深い感銘をうけ、数ヶ月の間、どんなにうまい料理を食べても味がわからぬほどであった。孔子は言った。夢にも思わなかったことだ。これほどの音楽があらうとは。」〔子在齊聞韶。三月不知肉味。曰、不図、為樂之至於斯也。〕

◇大韶の曲は特別だ。善美の限りを尽くしている。これに比べれば、武の音楽などは美の限りを尽くしているが、しかし善を尽くすものとは言えない。「子謂韶。尽美矣。又尽善矣。謂武。尽美矣。未尽善也。」とは言え、わしは決して舜王と武王との帝位継承の方法の違いを道義的に比べて善と言っているわけじゃない。純粹に音楽そのものの内容のことを言っているのだ。

○それはわかりますが、それでも東洋人の特徴として、剣術が剣道になり、生花が華道になり、嗜好品のお茶でさえ茶道になるという風に、音楽にも精神的・道義的な要素もあるとお考えでしょう。

◇それはそうだ。不仁の人が礼を行ったとて何になろう。不仁の人が樂を演奏したとて何になろう。「子曰、人而不仁、如礼何。人而不仁、如樂何。」

○これは厳しい。現代風に言えばさしずめいかに打率の高いプロ野球選手でも、麻薬なんぞに手を染めては何にもならぬ、ということですね。

◇当然だよ。詩を読んで人間的感情を呼びさまし、礼にのっとって人格内容を充実し、音楽を学ぶことによってハーモニーを完成させる。これが教養の過程なのだ。「興於詩、立於礼、成於樂。」だから魯の三人の実力者が、自家の廟で、祭祀の終わったあと雍の曲を奏しながら祭器を取りおろしたとき、わしはそれを非難した。歌詞をよく見るがいい。『介添えするは諸候たち、天子は在ますおごそかに』とあるではないか。あれは天子の音楽で、陪臣ふぜ

いの家廟で奏してよい曲ではないからね。〔三家者、以雍撤。子曰、相維辟公。天子穆穆。奚取於三家之堂。〕何ごとにもTPOということがあるが、とくに音楽ではそれが厳しいのだ。同様に季氏が天子の舞樂である八佾の舞を家廟で舞わせた時も、これほど耐えがたい非礼がまたとあらうかと批評したことがある。〔孔子謂季氏。八佾舞於庭。是可忍也、孰不可忍也。〕

○大韶の曲の他に先生のお好きな曲はどんなのがありますか。◇たとえば閔雎の曲だね。あの曲は人の心を浮き立たせるが、決して卑俗に陥っていない。悲しみに満ちている箇所もあるが過度に感傷的ではない。「子曰、閔雎樂而不淫。哀而不傷。」

○例の詩経の冒頭にある「関々たる雎鳩」の詩に付けた音楽です。

◇そうだ。これは楽官長摯の作曲だが、この人の曲の中でも閔雎の曲の終樂章は特に素晴らしい。その響きは果てしなく耳に拡がる。〔師摯之始、閔雎之乱、洋洋乎盈耳哉。〕

○好きだとなると徹底的に勉強するのが音楽に対する先生の執念だったと伺っています。

◇そうだ。合唱会を催していて、歌が気に入るとそれをくり返して歌って貰い、それから自分もいっしょに歌うのがつねだった。〔子与人歌而善、必使反之、而後和之。〕

○音楽に関する先生の業績についてお話し下さい。

◇わしは衛から魯に戻って後に、古典文化の整理にかかり、音楽では正調を復活させ、詩では雅と頌とを正しく分類した。〔子曰、吾自衛反魯、然後樂正、雅頌各得其所。〕

○先生の塾のお弟子さん達は音楽にも堪能だったのでしょうか。◇たとえば由（子路）だ。わしは音楽には厳しかったから、ある時「由の琴ときたら、わたしの家ではどうもね」といったところ、これを聞いて弟子たちは子路を甘くみるようになったものだから、こう言ってやったよ。「由の腕前は相当なものなのだ。表

座敷では十分通用する。奥の間ではまだ無理だと言っただけだよ」とね。〔子曰、由之瑟、奚為於丘之門。門人不敬子路。子曰、由也升堂矣、未入於室也。〕

○演奏についての先生の指導方針をお聞かせ下さい。

◇指導方針と言うよりは好みの問題だがね、弟子たちの中でも先輩の諸君は、礼にしろ音楽にしろ野性味たっぷりだし、後輩の諸君は洗練されている。どちらかと言われたら、わしはやっぱり先輩の諸君の方を評価する。〔子曰、先進於礼樂、野人也。後進於礼樂、君子也。如用之、則吾從先進。〕

○一般の人々は先生をコチコチの道学先生の代表のように思っています、こと音楽に関しては案外ロマン派ですね。音楽の演奏の方でもさぞやしきたりにうるさい正統派と思っていたのですが、ところで先生ご自身の演奏について：

◇ひとつエピソードを話そう。わしが衛にいたころ、ある日磬を打っていると、モッコをかついだ男が通りかかった。男はもれてくる磬の音に耳をすませて、「ウム、これは時世を憂うる人物だ」なおしぱらく耳を傾けてから、今度は「いや、どうも未練がましいぞ。世に自分を認めてくれる者がないと悟ったら、このわしのように身をかくすだけだ。『深い河なら裸で渡れ、浅い河なら裾をからげて』さ」こう言い捨てて立ち去った。それを伝え聞いてわしは言った。「そこまで割り切れるなら……。だがわしには、人間の世界はもつと複雑なのだ」とね。〔子撃磬於衛。有荷實而過孔氏之門。曰、有心哉擊磬乎。既而曰、鄙哉硜硜乎。莫己知也、斯已而已矣。深則厲淺則揭。子曰、果哉。末之難矣。〕

○磬というのは石で作った木琴のようなもの、いわば石琴ですね。それにしても、音を聴いただけで人物を当てたというモッコ担ぎの男の眼力も大したものです、全人格を楽器の音に込めて表現できたという先生の演奏も大したものでね。だれが叩いても同じような音がすると思われがちなのですが。

◇礼、礼と人はよくいうが、儀式を飾りたてるだけが礼だと思っているらしいね。音楽、音楽と人はよくいうが、楽器を鳴らしていれば音楽だと思っているらしいね。〔子曰、礼云、礼云、玉帛云乎哉。楽云、楽云、鐘鼓云乎哉。〕

○よい演奏というのは指先の技術だけではなく、心を込めなければよい演奏とは言えないということですね。まだお聞きしたいことは山ほどありますが、時間になりましたので、このへんで最後に先生の音楽論を簡単に纏めて下さい。

◇有益な楽しみを三つあげよう。礼や音楽をリズムカルに行う楽しみ、人の美点を吹聴する楽しみ、良友を多く持つ楽しみ、これは有益だ。楽しみだが有害なものを三つあげよう。わがままに振舞う楽しみ、怠けて過ごす楽しみ、酒色にふける楽しみ、これらは有害だ。〔子曰、益者三樂、損者三樂。樂節礼樂、樂道人之善、樂多賢友益矣。樂驕樂、樂佚樂、樂宴樂損矣。〕

○貴重なお話をうけたまわりました。今日は二十五世紀の時空を超えて対談を実現させて戴きましたが、できましたら再度このような機会を設けたいと思いますので、その節は先生の音楽観をもっと掘り下げてお聞きしたいと思います。ではこれで終わります。どうも有難うございました。

あとがき 会ってみると孔子は意外に気さくな人物だった。二千年五百年を隔て、海を超えて出現し、始めはいささか戸惑い気味のようだったが、音楽が接点となつてすぐに打ちとけ、対談に応じてくれた。通訳には左記の文献が当たってくれたことを深謝する。

久米旺生記 論語

松波茂夫・竹内好監修

中国の思想 第九卷
徳間書店、一九八六

座 談 会

「海と山と空と、遊ぶ心と」

鈴木 健 弘

神 島 茂 夫

斉 藤 修 弥

斉 藤 光 史

(編集委員・加藤、三村、村井、児玉、沢山、大久保、青木)

昭和63年 7 月26日

於 ニュージャパン

沢山 お忙しい所ありがとうございます。
会員の先生方のなかには、趣味やスポーツに玄人はだしという方が多数いらっしゃるんですが、今日は四人の先生にお集まりいただきました。私から肩書をご紹介しますと、

鈴木先生は室蘭地方スキー連盟結成以来の会長でしたが、現在は名誉会長に推されております。神島茂夫先生は、たいへん数多いんですが、室蘭音楽協会理事長、室蘭文化連盟副会長、小型船舶安全協会々々長そのほか清水ヶ丘高校同窓会々々長もされてます。斉藤修弥先生は室蘭陸上競技協会々々長、日本体育協会公認のスポーツドクター、それに最近話題になっている室蘭ルネサンス運動の再開発市民協議会々々長代行。

斉藤光史先生もいろいろやっておられますが最近、日本宇宙少年団室蘭分団長として宇宙に夢をかける青少年の育成に活躍されております。われわれ編集委員から今回は永遠の文学青年・加藤先生に語部として座っていただいて、という趣向になっております。私が司会の挨拶というわけになりましたが、よろしくお願いいたします。

まずはノドをうるおしながら、スキーの話から入って行きたいと思います。

衝突といえ

鈴木 ちょっと訂正を。室蘭スキー連盟がつくられたのは四十年前です。私が会長をやっていたのは十四年間でした。

昔の室蘭はずいぶん雪が多かったんです。母恋の奥の小学校でしたが大雪で行けない日もあったんです。トッカリシヨや母恋富士が牧場でしたからね。冬の体操は全部スキーでしたから小さい頃から滑っていた、ということですね。

神島 生れた時から上手だった。(笑)

加藤 坂が多いからどこでも滑れましたよ。長靴を皮バンドで締めて、馬の腹ぐり抜ける芸当やる子供もいたりね。

鈴木 本当にいましたね。スケートも雪スケートというやつ。

神島 先生がスキーやっていたこととゴルフのスコアとは無関係じゃないね。(笑)

加藤 昔はスキーはいてエッチラオッチラ上ったでしょう。今はリフトで楽なんだけど、あれ、どうなんだろう。

鈴木 スキー場が大きくなりましたからね。それに今のスキーそのものが歩く様にはできていないんです。滑る、降りる専門の用具になった。金具は衝撃ですぐ外れるようになっていくけれど、膝の幅なんかで調節するわけです。たいいていの人は調節しないあの器械さえつけていれば絶対怪我しないと思っています。だから事故もあるわ

け……。

神島 事故は年々減ってますヨ。骨折も。

鈴木 凸凹があると大きい怪我になるので、グレンドは凸凹をつぶす方向に行ってます。衝突された人が相手を訴えた事件も現実にありますよ。

児玉 衝突といえば、今度の潜水艦の……あれはどうなんだろうね。

神島 海上衝突予防法というのがあって、真直ぐ行くべき船と回らなければならぬ船とがある、右側交通ですからね。しかし咄嗟の場合、やはりあるんですよ。

加藤 あれだけ輻輳している航路だから、ぶつかっても不思議ないけど、変だなと思つたのは潜水艦の乗員が助けに行かない、飛び込まない。気になるんだなあ。

鈴木 水兵さんだから泳ぎうまいんですよ。

神島 あの釣船はサケマス独航船を改造してるんですよ。だからお客さんがすぐ脱出できない構造なんですよ。私の船はそんなことはないけど。(笑)

何時、誰でもが救命ボートを操作出来るように皆、四級の免状持つてる筈ですよ。おそらく軍隊の規約で行動とれなかったんじゃない?

加藤 オーベンも慌てるだろうし。命令なくして動くべからず、か。

児玉 仲間が落ちたら直ぐ助けたろうね。

三村 現代の精神構造の歪みと僕は見ています。事故犠牲が否定されてますし、特に若い人達はニヒルですから。

斉藤(修) 若い人といえば評論家が多くて実際の行動には臆病になってますよ。失敗してもいいんじゃないかって思うんだだけどね。

加藤 若いって、どの辺までの年齢?

斉藤(修) 自分が若い、と思ってる人はトシヨリですよ。(笑) まあ、二十代——三十代までいくかな。お利口ですよ。挨拶もスピーチも上手だけど迫力が無い。それにマッチするアクションをするかというところやらない。

加藤 義理人情もなくなった、ナニワ節も影をひそめたからね。日本語で言えば。

宇宙少年団とは

三村 光史先生、少年とつきあい広い宇宙を語っている、子供に戻ったような気持ちしませんか? どんなキッカケで?

斉藤(光) 青年会議所に居た頃、まあ修弥先生に強制的に入れられたんですがね。(笑) 事業のなかの青少年育成に興味を持って、そのためには今の世代の子供を知らなくてはいけない、という反省を抱いた訳です。会議所を止めた後、PTA会長をや

って子供と接し三十代の親とも接し、先生とも話して来たんだけど、いろんな性格の子供がいるんです。批判も必要だけど、我々もその中に溶け込んで行つて考える事も大切なんです。

三村 ロケットとどう結びつくの?

斉藤(光) やはり青年会議所時代に「日本宇宙少年団」、これは宇宙開発産業活動とも結び付くんだけれど、その存在を知ったんです。アメリカ、カナダ、ヨーロッパの国々では日常茶飯の話だし、宇宙センター位の規模の施設がいろんな地方にあるのに、日本は遅れている。大人が、親が遅れているんです。

加藤 いま実際にどんな活動を?

斉藤(光) 筑波科学万博後のイベントの一環なんだけど、宇宙飛行士の生活、星、ロケットはなぜ飛ぶのか、空気のないところで人間の身体はどうなるんだろう、などを勉強しよう——というわけです。

神島 無重力状態での病氣治療やね。

斉藤(光) そうです。国際ジャンボリーが米国である時は、その準備やら知識やらオクラホマのナサ(米航空宇宙局)にも行きました。小学生から高校生、大人まで誰でも入れるんです。

加藤 少年団の子供達は、宇宙旅行を相当近未来に思っているんでしょう?

斉藤（光） いや、そうでもないんです。

宇宙飛行士やジャーナリストを招いて話をしてもらう時もずいぶん気を使いますよ。やさしく分かり易く子供達が興味を持つ様について。我々が思っている程知識あるわけではないんです。学校の先生方が大体そうですから。

大久保 光史先生、飛行機がグライダーの免許は？

斉藤（光） ぼくは宇宙が好き、星が好き、そんなんじゃないかと、（笑）ソ連の子も米国の子も言葉は通じなくとも、どんどん出て行けばすぐ友達になれるんだ、分かり合えるんだ……そう言ってるんです。

鈴木 なる程、子供が好きなんだ。その方が立派ですね。

レジャーについて

鈴木 ルネサンス運動や室蘭の開発に関係あるかもしれないけど、フランスに二十年も前から九つの新しいスキー場があるんです。その規模たるや、延べで三〇〇キロ、小さくても一五〇キロなんです。ニセコはせいぜい五〜一〇キロです。アルプスの麓という懐の深い場所柄もあるけども、その発案者は僅かの人達で、大資本や企業が全然入っていないんです。そこが非常に面白いですよ。応援したのは銀行なんです。

全く何も無い処に忽然としてホテルが出来る。それが七千人収容なんですヨ。昔の洞爺湖の客全部です。そのビルの中に警察、学校、郵便局、マーケット、ファッション関係まで入っていて、完全な町なんです。この壮大な計画を、一年二年なんてものじゃなく二十年かけて仕上げてるんです。

加藤 あつちの地形は草原が多いんですよ。樹木は少ない。

鈴木 日本はすぐ結果を求めたがりです。一、二年で何かをしなくてはとかネ。

加藤 官のプログラムでもそうなんだな。二十年の計画なんか余程じゃないと考えられない。だから、渚をつぶしてせつせと埋め立てて、思惑が外れると借金だけが残るんだ。生命進化の上陸地点ですよ、渚は。

大久保 神島先生、海のレジャーの場合、室蘭は小樽に劣るんでしょう。ヨットの数、大きさ、ハーバー施設など。

神島 歴史がないからね。だからイベントもたくさんやって、今から受皿を作ってやらなきゃならないこと。

児玉 ヨットは高嶺の花過ぎるもの。神島 そうじゃないの。（笑）

一八〇万の船は月三万出せば買えるでしょう。常にPRしてるんだけど……。

鈴木 まだPR不足ですね。テレビにも出していないし。

大久保 特別ヨットクラブに入らなくとも気軽に、ひよつと乗ってくれる——そんなところから子供達が育ってくればいいなあ、と思うの。室蘭に居ても魚釣りやらない限り船に乗るってことないもんね。

神島 レジャーも立派な産業ですよ、殊に室蘭では必要ですよ。

三村 単純に自然破壊って言うけど……。

加藤 私は反対派。（笑）自然をいじるのはもう結構。室蘭だって、渚という渚を埋めてコンクリートで区切ってしまったって、昔から遊泳不適のイタンキ浜を整備したって言うけど、一週間も泳げないなんて漫画にもならない。

神島 外国では、海水浴場には必ずプールがありますよ。海で泳げない時はそこで泳ぐ、記録作るんだったらプール。海岸では日向ぼっこすりゃいい、海の水に足を入れるだけでいい。「われは海の子」って言うけど今の子は海を知らないよ。

三村 漁師の子が海で泳げないんだって。びっくりしちゃった。

加藤 仕方ないんだ、今は。（笑）日本人はもともと海洋民族ではない、海岸民族だといわれてるし、海洋冒険小説のジャンルはないんだから。

鈴木 渚の問題はそうですけど、山はもう少し市民の楽しむ場を作ってもいいんじゃない

ないですか。だんバラの場合、雪の上で楽しむ、ただ滑るだけでいい。冬の楽しみに飢えている市民の心にこたえられるだけでいいんです。だから伐った樹の二、三倍は植樹する計画なんです。上級者志向まではいらないですから。

児玉 でも今の状態ではネ、もう少し延ばして欲しい。

神島 それがこわいんだ。(笑)

「残す」ということ

児玉 ぼくの家の上、野鳥園に通じる道路だけブルドーザーが入ってますよ。

加藤 知らなかった。あそこは庭なんだよなア、庭にまで手をつけちゃねえ。

斉藤(修) 測量山に車を入れなきゃいいんだ、自然公園だもの。

大久保 測量山も地球岬も、あまりにも便利を考え過ぎている。歩けばいいの。

斉藤(修) ぼくもそう思う。大型バスなんてつける必要ないよ。イタンキから歩いて行つてはじめて地球岬の良さがわかるんだから。やはり長期のビジョンが必要なのに、すぐ来年の便利さで拍手をもらいたい人達がやるから駄目なんだ。

加藤 私はここ一年に二、三回しか地球岬に行つてないの。私のイメージではなくなつたから。車と人であふれて、缶コーヒー

飲んで何やら食べて、まあ、これが観光なんだね。蝦夷の地も大隅半島も展望台から見えるものは皆同じ、その土地の体臭を残してないってのはおかしいよ。

斉藤(修) その土地にあるのが文化でしょう。飲み屋だつて、どこのビルに入つても同じ様なインテリア、同じ様な女の子でしょう。(笑)札幌で飲んでるのか九州で飲んでるのかわかんないって言うんだ——嘆いてる飲ん兵衛がいますよ。(笑)

大久保 札幌は歩いてみる街でしたよね。それが、地下鉄の入口も出口も顔を出せば同じ建物の風景になつてしまった。室蘭はまだ歩いて楽しめる所がありますよ。それを活用しないと。ジェット機で駆け抜け、文化を素通りする近代化——そうでないものを室蘭の街には残しておきたいなあ。

加藤 アマゾン流域の密林がどんどん伐られてるんだけど、ランドサット(資源探索衛星)からの写真を見て驚いた。四角い大きな禿地がずいぶん増えていてね。あと二年も経つたら大気組成の変化で大問題になるって学者は騒いでるんだが。

斉藤(光) やはり教育ですね。戦争体験をわれわれの年代なら親から聞く事ができたけど、今の子供は全く知らない。だから反対も出来つこない。自然の問題も同じで、こういう理由だから反対もあるんだ、と親

も先生も子供と腹を割って話さないといけない。軽井沢でも、ああいうリゾートつてのを若者は非常に喜ぶけど、本当はそうじゃなくて、自然の美しさ、何も無いところで星がいかに奇麗か、それを教えなくては駄目だと思う。

神島 自然の営みを知らなければ、人間も動物なんだ、という事がわからない。

加藤 土と草をどれだけ残すか、の知恵が必要なんだ、地球上にね。

私は家の回りの雑草は刈らないの。タンポポや野菊も咲くんだけれど、雑草に合せてペンキ塗り替えもやらないから、八幡さんの行列の人達は「汚いな、なぜ刈らないんだろ」って顔付きで通り過ぎる。営業に影響するけど(笑)私は完全に依怙地になつてるから。(笑)

斉藤(光) オクラホマ州は日本の一・五倍あるけど、その中に自然もあり宇宙施設もあるんです。どちらか一方ではなく両方やつていく、そういう教育ですよね。

大久保 室蘭にまだ一つだけ、茶津山が残ってますね。日鋼のもんなんでしょうけどあの山だけは保存して欲しいと思うなあ。展望台造つて港一望だなんてすぐ考えるんだから。競技場でもだいぶ削られたネ。

加藤 入江の運動公園、あれはヒットだと思つてるけど。

沢山 修弥先生、ルネサンス運動についていかがですか。わからないって人が多いと思うんですけど。

斉藤(修) うーん、わからないって云えばルネサンスの言葉の意味からして何の事かわからない知識人だって多いですよ。ぼくだってわからない。(笑)

今迄、室蘭の人は自分では何もしていない。お上^{かみ}にお願いし、大企業にお願いして……もう、そんな時代ではないんだからとに角、みんな手をつないでやって見ようじゃないかって……。

神島 意識改革なんですよ。

斉藤(光) 文学でもスポーツでも一所懸命に考えている人はいるんですよ。そういうグループとも手をつないで……。

斉藤(修) 手をつながなくともいいですよ。同じ舞台で話し合えばいいんです。

鈴木 先生、ルネサンス運動は早急の成果を目指しているんですか？それとも相当長期の運動として？

斉藤(修) 両方ですよ。市民の意識参加と身体を使つてすぐ出来るもの、一方にはやはり時間がかかっても「夢」を追って行くんです。

鈴木 抽象的なんだなあ。

斉藤(修) コンベンション・シティなんですね。一口で言うとな本の柱があります。

先づ討論、そして鉄鋼博物館、海を主体とした一大レジャーランドを造ろう……。

鈴木 それがすでに抽象的。(笑) 一〇年二〇年かけるというならわかるけど。

加藤 こういうインテリゲンチヤがですよ、わからない、抽象的だと言う。そういう人達にそう言わせなくするにはどうしたらいいか、つてのが一つのポイントかな。

斉藤(修) そういう人達こそ、この運動に入ってもらいたい。(笑) 先づデイスカッションとアクションです。身体を使つて動かないと、この街は絶対良くならないですよ。

大久保 ルネサンスとシンボルを創る会、あれは別々というけど、トップの五、六人は同じ顔触れですよ。とりあえず一緒にならないの？

斉藤(修) あちらが先行してたんです。大久保 どちらが先でもいいと思うけど。

斉藤(修) とに角ね、室蘭始まって以来の市民運動なんです。広い各層の人を集めてね、そして「夢」を実現しようとする、素晴らしいんですよ。

加藤 貧者の一灯が多くても困るだろうけど、おとうちゃん、おかあちゃん達も納得させる具体的な言葉が欲しい。

大久保 シンボル、モニュメントでも新しいものを創る事ばかり考えて、古い物を残

す事を忘れてますよ。トランスポーターの高架なんか一部でも残して欲しかったナ。溶鉱炉もあるしね。

斉藤(修) それも出てますよ。色んな話が出ています。

三村 まあ、先生みたいな人が居ないと、どんな運動でも歩き出しませんもネ。

鈴木 町の活性化というのは街が明るくなるってことです。それが八時か九時前にはシャッターおろすんだから——暗い。商店の持つ比重は大きいですよ。ルネサンスの第一歩は商店主の意識改革と言つてもいいと思いますね。

神島 日本は宗教がない国みたいなもんだから、ボランティアやつても問題にぶつかりますね。

加藤 宗教が無いって言うけど、世界中の宗教が集まっているんじゃない。宗教に限らず世界中の何やかや全部集まってる。

鈴木 その意味では世界に冠たる国ですね。(笑)

加藤 いい振りこいて居た時はわざと背中であ聞いていたけど、近頃は、石川きゆり、美空ひばりの歌を聞くとホッとする。安心するんだ。

斉藤(修) やつと結論出ましたネ。(笑)

沢山 では最後に村井先生、お願いします。村井 僕は聞いている方が好きなんです……



齊藤 (修)



鈴木

頭を突っ込まないんだけど（つつこみなさいヨ）……日本中至る所で、いまイベントが大流行です。それぞれ効果を狙ってるんじゃないのが、大体同じなんです（おなじではないって——笑——）成功したのは神戸のポルトピアですね。あれは相当長期間の準備と構想から生れたものです。

単なる経済効果をねらったお祭りばかりが多いのは困るんで、本当に大切なものをじっくり見詰める心でやってもらいたいですね。（拍手）



司会 沢山

齊藤 (光)



加藤



神島

（座談会終）

—大正つ子物語—

「時の点鬼簿」から

加藤 治 良

矢 尻

最後のドカ雪が消えた。

室蘭岳の頂上近く、まだらに残っている雪の白さにも冷たさは感じられない。

磯の香に、濡れた土の匂がまじり合った春の体臭が、日一日と強さを増してくる。

「鼻ごんごん」が店に現われる頃なんだ、と じろう は思う。一岬越えたエトモの部落から、鼻ごんごんは春風とともにやって来る。背が低く細っこいアイヌの爺さんだ。

磯回りの小漁師で婆さんと二人暮らし、まだまだ達者なのだが、なにせ、焼酎には目がなかった。

じろう には待つだけの理由があった。

「やあ、しばらくたつたネ」

ほら、鼻ごんごんの声だ。

「おや、一人かい。どうしたの、婆さん」

「腰いためて、ためなんだ。なーに、たいしたことない」

「じゃ、じいさん一人で産物に行くのかい」

「たいちよぶた。帰りに寄るからナ、ばんとうしゃん」

番頭の松さんと、そんなやりとりの後、ねえやの澄ちゃんを持つてきた小さなザルに岩海苔を分ける。かわいらしいガンゼを二つ乗せて

「ノリはいちばんうまいところだ。ガンゼは飾りたヨ」

その通りなのだ。ひれ薄でやわらかく、深い緑は磯と早春の陽光の香を、きっちり蓄えている。

結構な値がつく時季だから、量目は少なくとも、毎年早やばやに岬を越え、二つの町並を過ぎて、海岸町の産物市場へ持つて行く。その後も、いい値がつく磯物を市場に届けているのだが、これはすべて婆さんの役目だ。

月に二、三度は爺さんも一緒にやって来て、婆さんが戻るまでの二時間近くを店の上りがまちで焼酎を楽しむ。

「番頭さん、二杯までだよ」

その都度の念押しを婆さんは忘れない。

「鼻ごんごん」は店のあんちゃんの富やんがつけた名だ。富やん自身も口の悪い客たちから「ソボロあんこ」の綽名をもらっている。顔一面に薄い点々のシミが浮いているからだ。

鼻ごんごんの話し方はおもしろい。愛嬌がある。

もともと濁音が全部消えているうえに、鼻にかかった半濁音が一種独特な響きをするためなのだ。ごま塩の髭は頭の毛と眉毛ともつながっていて、野性的な風貌は相当なものだが、小柄で人の好い爺さんだからじろうは恐ろしいと思ったことはない。婆さんも似合いの背格好で、口の周りにくつきり青い入墨をしていた。

産物市場から戻ってきた爺さんは、店の上りがまちに腰をおろし、焼酎コップの最初の一杯をだいいじそうに両手にはさんで、茶の間に声をかける。

「たいぶ、ぬくくなつたね、おかみちゃん。汗かいてしまったヨ……ぼうやしやんは、こんと、なんねんしえいになるの?」

三年生なの——じろうの母が答える。

茶の間と店を仕切っている硝子戸から覗きながら、じろうは鼻ごんごんの懐を気にしていた。

いつもなら、婆さんにきめられた定量以上をせがむときに取り出すのだが、今日は今年初めての見参なのだ。

「しゃかい、もう、しゃんねんしえいになるのかい」

コップを横に置いて、じろうを手招きし

た。もう一度「しょかい」と背いてから懷に手を入れる。

「ほら、ぼうやしゃん、ヤチリだ。ほら、てっかいのたヨ」

やあ！本当だ。でっかい矢尻だ！

その頃はもう、エトモのチャシから完全な形の『矢の根石』を見つけ出すことは難しかった。殆どが欠けているか、割れたカケラだったから、じろう達浜の子供にとつて宝物同然になっていた。

鼻ごんごんの手掌にのつかっているのは柄の部分もいれるなら十握はたっぷりある見事なやつだった。

水に濡れた海炭のように艶やかな黒光り、その尖端は一分の欠けもなく、キリリと引絞られて獲物を狙ったのは昨日のことかもしれない、と思わせた。

学校の職員室に飾ってある額の中に並べてもいいくらいだ。笠原のテツちゃんに見せたら何て言うかな——新学期になるまでじろうは待てない。

鼻ごんごんは逆さにした焼酎コップを手のひらに向け、とんとん叩いて、ちゅっと吸った。

「こちそさん」

「おや、一杯でいいのかい？」

松さんが驚いた声をかける。

「ばあしゃんに、こしゃかれるもナ。きよは、これて、こちそさんた」

声は出さずに口だけで笑った。

「松山さん、一合持たせてあげて。矢尻のお礼だから」

「いやいや、おかみしゃん、とうもとうも」
脱いでいた山犬の毛皮の袖無しに腕を通し、鼻ごんごんは土間に立った。

毛むくじやらの剛い手が、じろうのいがぐり頭を撫でる。焼酎と磯の匂いも混じった強い体臭がした。

じろうは矢尻を握って表に飛び出した。春風に吹かれて鼻ごんごんが歩いて行く。陽炎に包まれて、小さく揺れていた。

人 魂

昼休み、校庭の貝塚の上で寝転んでいた大崎のショッコが

「じろ、今晚見に行かないか」

「何を」

「ヒトダマ」

三日前、鯨会社に運ばれてきた長須鯨の解体作業はほとんど終っていた。ショッコのいうヒトダマが何かを、じろう達五年生は皆知っている。しかし、ほんとうに見た

者となれば、話は別なんだ。

「うん、行く」

「トシとヨシと……ヒロシも誘ってみつか」

「五人だな。晩飯すんだら店の前に集まれや。がん灯、持って来いよ。忘れんな」

夕食のお膳には鯨の炙り肉を盛った大皿が並べられた。醬油にカレー粉をふりかけ箸の先でかきまぜ、その中に転がしたやつをご飯茶碗の上で軽く、とんとん。

高羽場長さんが特別に吟味してくれた肉だから、じろうも店のあんちゃん達もご飯のお代わりお代わりで、またたく間に平らげてしまった。

「鯨会社の岬なの？危なくないの？暗いんだから……」

じろうの母はまだ心配している。

「だいじよぶだつて」

「遅くなったら駄目」

「うん」

返事もそこそこに、じろうは店から表に出る。七夕提灯を二つ手に持った。

店の前の電柱灯の下に四人が立っている。

おや？もうひとつ、チビの影がいる。

「こいつも従っていくってきかないんだ」
中江のトシの手を握っているのはマッコちゃん、一年坊主になったばかりだ。

「大丈夫だべか」

「マッコ、おつかないーって泣いたって、あんちゃん知らないド」

大崎のシヨッコが

「まあ、いいベヤ。さあ、行っか」

「マッコちゃん、したら、これ持つてけ」

じろうは提灯を一つ貸してやった。

鯨会社の岬の空はまだ暮れ切っていない。ほんのり明るさが残っている。

エトモの部落に通じる坂道を登って、途中から右に折れると岬の背中に出る。坂の登り口で、がん灯にローソクの火をともした。缶詰の空缶に二十ぐらい釘穴を開けただけのものだが、四つ集まれば心強い。

岬の上、背丈以上に茂っているドンガイとヨモギの原っぱを抜けて、まばらに木立が並んでいる、そこまで伝って

「よし、此処だ」

確信をもったシヨッコの声だ。

「下、見てみる。ボーツとしてるべ」

工場の大きな屋根と処理広場が、見下ろす目の下を黒く横切って、浜辺寄りの水面が青白く淡い輝きに揺れている。

燐光だ。砂浜の底に沈んでいる長須鯨の骨から出る燐光だ。

島燈台の光芒が薄闇の空気をはらって、じろう達の背後からさーっと流れた。

「ヒトダマー出てこい。ヒトダマになれ」

「ヒロシ、やめれ。マッコが泣くど」

ヨシが注意した。

三分ほど、しーんとして……

燐光の揺れが、もうひとつ、大きく動いたと見た時、青白い小さな光の玉が二つ、切り放されたように暗い水面に浮かんた。

「あッ、生れたー！」

「ほんとだ！」

「ホラ、わかっか、マッコ。見えっか？」

「二つだ」

ひとつが、ゆっくり横に流れた。

「ア！浜さ上がるド」

だが、一瞬、黄色つぼく輝いてスーッと消えた。

もうひとつも、後を追うように流れて消えた。

……………

みんな、ふうーつと大きな息を吐いた。

向う岸、本輪西の町の灯が点々と並んでいる。夜汽車の長い響きが聞こえ始め、その灯を一つ一つ消して行く。

坂の戻り道に出て——おや？何だ、あの音は——。

ヒュルヒュルでもない、チャラチャラでもない不思議な音が、じろう達が今まで居たあたりから追いかけてくるのだ。

シヨッコも足を止めた。ヒロシとヨシも振り向いた。

「おい、何してんだ」

中江のトシとマッコちゃんは坂道の途中まで下りていた。七夕提灯が曲がり崖の角あたりに見える。

「変な音、きこえんのヨオ」

提灯が近づいてくる。

「…ア、とまった」

「聞こえなくなったワ」

ちよつとの間、耳を澄ましてから四人はトシの所まで駆け降りた。

「変な音って何ヨ」

「変な音だ。気味わるい音ヨ、なあ」

「それもナ、おれ達の居た場所からだ」

「何の音だったんだべ」

家並みが続く道路に入ってから、じろうは（ああ、そうか）と思った。

「あれ、汽車の音だワ、きつと。ドンガイの葉っぱ、ふるえたんだ」

木村のヨシが

「いや、あれはお前、ヒトダマの泣声だ」

「バカ、はんかくさい事言うな」

大崎のシヨッコがわらった。皆笑った。

だいぶ円くなった月が、鍋島山の真上にのぼっていた。

——終り——

親交会創立三十五周年

記念旅行

香港・マカオの旅

昭和62年11月20日—23日

名勝地 レパルス・ベイにて



記念旅行 事の次第

大岩 昌 生

私は旅行大好き人間の一人です。旅の初めには大きな期待と多少の不安、旅の終りには満足感とちよつぱりの哀愁を残して思ひ出を反芻するのが又たまらない魅力です。親交会の役員になってから色々な仕事の中でやはり楽しいのは旅行の計画から実施までの作業で、一番憶劫なのが文章を書く事です。いま雑誌波久鳥の編集氏に命ぜられて旅行記を書いて居りますが、面白い文の自信がありませんので事の次第のあらましを記す事に致します。

昨年（この文が雑誌に載るとすれば一年後になりますので、一昨年となりますか）札幌旅行の際に来年は親交会の三十五周年に当るので記念行事は何をやたらよいか相談しましたところ、殆んどが旅行希望でありました。其のあと会員の皆様からのアンケート回答を基に行事委員会で検討を重ねて三泊四日の香港方面視察旅行に決定した次第です。参加応募は同伴を含めて最終三十四名となりました。

細部計画について曲折はありましたが例年通り旅行業者に依託する事になり、十一月九日参加者全員集合で説明会を開きまし

た。ところが突然問題が生じたのです。出発は十一月二十日（金）午後の約束でしたが、成田直行便が使えなくなったとの理由で旅行社が勝手に朝の出発に変更したと言ふのです。当然先生方は午前中診療の手筈を決めている事でしようから混乱が起きるのは必至で、私は声を大きくして詰め寄り其の非をなじりました。結果国内路線を変更して何とか午後出発の線だけは確保したのでありますが、誠に胆を冷す出来事でした。

仲々計画通り行かないもので香港でのゴルフについても現地に到着してから急にスケジュールがvari、説明を受けた会員の中には「俺はゴルフが最大目的で参加したのに予定通り出来ないのなら明日一番機で帰るからキップの手配をしろ」と強く迫ります。当然の事で旅行社が現地と十分連絡しないで安請合するからいけないのです。畠山先生達の斡旋努力でどうにか希望のコースのブレイが出来る事になり安堵しました。其の他色々な心配ごとがありましたが、それらを差引いてもやはり旅行は楽しかった。ただ短い日程の中なのでショッピングにしろ夜の散策にしても自由な個人ブレイは難しい事でありました。第一夜はホテル到着が深夜に近く、第二夜は昼間の長距離観光でぐったり、第三夜はもう明日の帰国

支度です。しかし過密スケジュールの間をぬって夜会や下町情緒を楽しんだ話もちろほらありました。夜の姫君達のご感想などありましたらお聞かせ願いたいものです。

いづれ参加の先生方が分担して詳しい旅行記を誌上に発表されるそうですから、此の稿は終りにしますが、一つだけ申し上げますと今回は何人かの先生が同伴で参加して下さいまして、短い期間でありましたが奥様達を交えての色々な交流が出来、とてもよい雰囲気で終始致しました。従来会員のみでやっていました諸行事にも同伴者を多く加えれば、より親睦の目的達成に役立つものと思います。私も永い間親交会の事業や行事に参画して来ましたが、いづれ次代の人に引継ぎたいと考えていますので参考までに書き添えます。

香港旅行の六十二年十一月頃の外国為替レートは、米ドル百三十八円程で香港ドルは十八円位であったと思います。銀行やホテルは勿論市中の店など何処でも両替してありますが買物はすべて日本円が通用し、それも御の字の歓迎振ります。私達ツアーの現地案内人も手数料無しで愛想よくやってくれます。ところが旅行の終りが近づいて余分になった現地ドルを円に替えてくれるように頼むと途端に不気嫌になって仲々やってくれません。やがて米ドルは百円以下

になって香港ドルも十円に近づくだろうとささやかれて居り、現地の人達は日本円を懸命に溜めているようです。さて此の雑誌が発行される頃はこうなっているのでしょうか。

二日目はバスで市内観光から始まりました。香港の市街は狭い土地に六百万の人口ですから建物屋は殆んど高層建築で見事な都市美です。だがそれよりも期待した自然景観は意外に少く、夜景だけが有名ですが霧が深くて今回は残念ながらビクトリアピーク登頂はあきらめました。島の反対側へ抜ける峠でガイドの説明では、第二次大戦であるここに見える深水湾から日本軍の舟艇上陸作戦があり、この峠をはさんで英軍守備隊と激戦があったのだと言います。私達の年代は戦争の記憶が鮮明に残っている筈ですがこの事実は全く知りませんでした。それにしても史実を語るような遺跡が何一つ見あたらなかったのも不思議でした。

香港旅行の大きな目的は買物だと言えます。世界各国から商品が全部無税で入ってくるので価格は馬鹿安だそうです。私にはよく判りませんが、皮製品・衣料・時計などの一流ブランド物が日本での三分の一から五分の一で買えると言いますから特に女性の方々には大変な魅力だと思えます。それとは別に面白かったのはブアマンマーケ

ットと言う所に立ち寄った時です。ローレックスの時計やルイビトンの鞆などの店が軒を連ね、お祭りの屋台のように甲高い売り声が飛びかかって買気をさそいます。実はこれらは全部イミテーションで、時計は最初七千円から粘り強く交渉すると二千円位になります。私も一個買いましたがダイヤ十三個入り(勿論ガラスでしょう)金側金バンドで全く偽物には見えません。物知り聞いた所では、二・三年は正確に動くがそれ以上は保障に非ず、故障しても時計屋に持って行かない方がよい、恥をかくだけだと言う事です。(昭・六二・十二記)

香港あれこれ

上田 智夫

開業医という因果な商売をしていると、時々無性に国外に出たくなる。しかし、正月やゴールデンウィークなどの、ツアー料金の馬鹿高い時に、留守を気にしながらやっと一週間程度の旅にしか出られない身の上では、結局チマチマと香港とか、台湾とか、ソウルとかと言うことになる。

親交会で旅行した思い出を中心に、香港のあれこれを書いてみたい。何かの御参考にならば。なお、番号をつけた文字はクイズです、挑戦してみてください。

一、チップ

随分書かれてはいるが、実際あった事を。ポーターチップ

部屋に荷物を運んでくれたボーイに「外国では穴のあいた硬貨を珍しがるのよ」と五円貨幣を渡す。

私「？」

ボーイ「ノー」

一昔前には、ローマのフミチーノ空港でも添乗員が穴あきコインを集めたが、今時こんなチップが通用する筈がない。旅行者教育の悪しき忘れがたみ。

タクシーチップ

旅行ガイドには、十%くらいのチップを上乗せして差し出すこととある。ビジネス関係のひと、九竜と中環(一)の間をタクシーに乗った。御承知の様に、海底トンネルの通行税片道五ドルの往復分、十ドルはメーターと別に請求される。彼平然とチップの分は出さず。運ちゃん一寸妙な顔をするも、彼平然と歩き出す。

「相手は雲助だよ、往復の通行税を出させて、又帰りには別の客から往復の通行税をまきあげるんだ、泥棒に追銭はいらないよ」

私、何となく納得。

トイレ

富麗華酒店(2)の回転レストラン、「ラ

ロンダ」のトイレは、廊下に出て一階上に登った所にある。例によって番人が硬貨紙幣などを一杯入れたトレイを持って立っており、中には営業用の見せ金十ドル紙幣も一・二枚くらい。アメリカ人らしい客を横目で見ていたら、二ドル貨幣を入れてすっかり一ドル取った。アルコールが入って気が大きくなった貴方出来ますか？ちなみに、ここは外に張出したカウンターバーで飲みながら、ラロンダのショーを見ても、ショーチャージは無料である。

二、天星小輪(3)

香港島と九竜を七・八分で連絡し、早朝から深夜までおよそ二十分間隔で動いている。ハイヤー、バスは渋滞にまき込まれると三十分以上かかるので、非常に便利な乗物である。

一等七十セント、二等五十セント。一等入口から入ると、ドラム缶の上にトイレのチップ入れより一寸大きい盆がのっている。持っている一ドルを立てているお兄さんに見せて、盆から三十セントひたくって入場する。お釣りを渡すとか、印刷した切符を作るといった面倒なことはいらない。

時間になると、セーラー服を着た爺さん(年寄が多い)が、ゲートを開けて船に踏み板を渡すので、サッサと乗り込む。あつという間に着いてしまうので、風情を楽し

むひまはない。船の名はすべて星、さて何という名でしようか。輝星(4)、日星(5)、燦星(6)。

三、MTR (マストランジット レールウェイII 地下鉄)

サブウェイ、チューブ、メトロと呼び名は各国で色々だが、安くて早い乗物に地下鉄がある。香港島内一路線、香港・九竜間に一路線で、東京の様な都営、公団入り乱れての繁雑さはない。(別に一路線あるが観光客の行く所ではない)

路線図で行先と金額を確かめ、自動販売機にコインを入れる。一ドル五十セントなら丁度の金額でないと切符は出てこない。はじめはこれがわからず、二ドル入れて一生懸命ボタンを押しても切符が出ない、入れ直してみても出ない。こわれているのではないかと思つたが、一寸様子を見る事にした。後で見ていた中国人が、ニヤツと笑つて一ドル五十セント丁度を入れると、アラ不思議券が飛び出してきた。奇蹟の人かと驚いたが、ナニお釣りまで出る日本式精密自動販売機に馴らされて、昔の事を忘れただけでした。

記念にと思つて、路線図と車輛を入れて写真をとつたら、係員がとんで来て「ノー フォトグラフ!!」 警察にでも連行されるかとドキッとしたが、フィルムも抜き取ら

れずやれやれ。国家機密なんでしょうかねえ。

シートはむき出しの金属のままなので、急停車するとツツと端の方までずべる。考えてみると、シートも痛まず、汚れず、いたずらされず、こちらの方が合理的か。

四、マーカー

今回旅行の時立寄った、マカオ行水中翼船埠頭の駐車場に夜になると出る、プアマンズナイトクラブは、安全ではあるが観光ショー化していて、本来のマーカーからは遠い。

豚の首がウラメシそうに目をむいていた、おやじが水鼻をこすり上げた手で、お粥をさし出したる屋台などの市場がある。

廟街(7)。地下鉄で尖沙咀(8)の次の駅の佐敦(9)で降り、左に二・三丁目の所から入る。日本人は、特に夜はほとんどこない。衣類、果物、野菜、肉屋、花屋、食物屋、屋台、庶民感覚にあふれている。生ジュース、ココナッツで一ドル。においを気にしなければ、屋台の乾し肉五十セントから一ドル、粥も同じくらい。

五、食事

今回食べた海鮮料理や、新満漢全席は高級品である。ちなみに、旅行案内で調べてみると、後者は一人前四万円という贅沢品

です。もつとも翠園酒家(10)で、六人から八人前の北京ダックを二人で一匹食べて、隣の席のカナダ人に目を丸くされた実績がある、私も威張れない。

同じ並びにある帝国中心(11)の地下、福満楼では、北京ダック半身一二〇ドル、醉翁生蝦(12)一人前三五ドル、サービスの「二人世界」二人分で五品で九八ドル。

現地の人がほとんどで、日本人向けの味付けになっておらず、油が強く一寸臭いがきつい、いかにも現地で食べた気はする。

朝がゆ。希爾頓(13)、マルコボーロなどでは、朝食のバイキングにまじって出るが、宿泊した喜來登酒店(14)は、コンチの朝食(コンチネンタル ブレックファースト)オンリーだった。斜め向いにある新世界中心(15)の地下一階、翠景粥麵(16)の朝食セツト、六から八ドル、最高級のアワビ粥で十二ドル、大変おいしい。

六、ショッピング

ツアアの現地案内人というのはピラニアに似ている。食いついたら財布が空になるまで離れない。

日程表に、午前観光、昼食(飲茶)、午後自由行動となっている。僅か半日の貴重な自由時間。

ガイド氏「一寸時間がおくれましたが、二時には解散して、自由行動にします」

宝石店、皮革専門店、骨董品、衣類など皆さん好奇心・購買心とも旺盛である。

私「一寸中僑百貨店に行きたいんだが」
ガ「次の免税店の近くですから、そこに下さい」

時刻は四時を過ぎる。

ガ「この店は以前免税店でしたが、ライセンスを前の店にとられた。けれども内容、価格は前の店と同じです」

何のことはない、免税店であつてもなくても価格は変わらないと言うこと。

私「一寸出て来るよ」

ガ「ホテルのフロントを六時に出発します。おくれないうで下さい」

中僑百貨店でスワトウのレース、中国服を、ペニンシュラ・ホテルの地下で、フォーシヨンのお茶とチョコレートを。次に近くの超級市場(17)に行き、ウイスキー、乾肉、小パッケージのウーロン茶などを購入。

香港はフリーポットなので、免税店の酒もマーケットの酒もほとんど価格差はない、免税店はリッチな日本人を狙ってレミーマルタン、カミュなどの、クリスタル・バカラ或いはナポレオン級の最高級品を並べてあり、ジョニ黒、オールドパー級は、店員に言わねば出さないか(言っても素直には出さず、高い品を買わせようとする)、或いは出口近くの物陰にあつたりする。免税

店でしつこい店員にいやな思いをするくらいなら、スーパ―が便利である。但しホンコンドルしか通用しないから、目算を立ててお金を換えておく必要がある。

七、新人類

かつて香港の路地裏では、いやメインストリートの歩道でも、朝は屋台でお粥や麺類、スープなどを、箱の上に渡した板の上に腰掛けて食べていたものである。

最近はずつかり様変わりして、若い人の食事は、ミルクコーヒー、パン、サンドイッチなどである。小ギレイな店で、コーラ、フライドチキンを食べている人もいる。

セブン・イレブンも多くなつた。私も、ホテルで高いビールを飲むより、ここで買って来ることが多いのだが、ホワイトカラ―の青年が忙しそうに入つて来て、牛乳とパン、或いは熱狗(18)を食べて出て行く。かつての大陸的、慢慢的、好好爺の風貌を急速に失いつつある様だ。ニックス、或いはニイズと呼ばれる、新興工業国の興隆をこの新人類達になつているのであろう。

(1) セントラル。香港島繁華街。

(2) フラマ―・ホテル。

(3) スター・フェリー。

(4) シャイニング・スター。

(5) ソーラー・スター。

(6) トウインクリング・スター。

(7) テンブル・ストリート。

(8) チムシャツイ。我々の宿泊区域。

(9) ジョーダン。

(10) ジェード・ガーデン。チェーン店。

(11) エンパイヤ・センター。

(12) 海鮮料理で食べた、老酒蝦のおどり。

(13) ヒルトン・ホテル。

(14) シェラトン・ホテル。

(15) ニューワールド・センター。

(16) グリーンビュ―・ヌードル。

(17) スーパ―・マーケット。

(18) ホット・ドッグ。名訳ですな。

香港旅行

丸田

浩

昭和60年4月、室蘭に赴任してから本格的にゴルフに熱中し(熱意の割に腕が進歩しません)、今回の香港旅行も由緒あるクラブでもプレーできそうとのことに参加することにしました。残念ながらゴルフは、いろいろな手違いがあつて十分に目的を達することができませんでした。旅行は香港、中国本土さらにマカオにも渡り、短時間の中で政治体制の両極端とそこに住む人達の生活を垣間見ることができ、初期の目的とは違った意味で楽しい旅でした。

まず香港の夜景の美しさには圧倒されました。東洋の真珠と称されているように、夜の美しさは評判どうりで、天候と時間の関係でビクトリアピークに登ることはできませんでしたが、狭い土地に山の頂上にまで家並をつらねた香港では、家々の灯りやネオンサインが頂までちりばめられ、それを船から見上げると暗闇からキラキラと輝く光が、我々にふりそそいでくるかのような錯覚を受けそれは見事でした。

ところが、昼間見る香港の様子は一変しており、夜とのあまりのギャップは、これが香港の実体なのだと感じました。道路は狭く、町並みは雑然としてごみごみと汚く、そここにバラック造りの粗末な住居が軒を並べ、なにやらいかげんしい雰囲気が出ています。町には人間が多く(土地が狭いせいですが)、活気にあふれてみえますが、その賑やかさはなにか危なげで、繁栄と貧困の落差は大変なものと思われました。香港という都市(というよりも国家)が、物を生産する手段をもたず、サービスを提供したり、商品を移動し消費することによって存在しているためなのかもしれません。一方国境を越えて、わずかしが離れていない中国本土にはいりますと、周囲の景色はまったく異なるものでした。町は一見清

潔で喧騒、騒音とは程遠く整然とした町並みですが、なんとなく活気がなくしかもどこから視かれているような、なにやら不気味な印象さえ受けました。中国という体制の全く異なる国にたいする私の漠然とした偏見あるいは警戒心だったようです。

中国は共産主義国家ですから、さまざまな商品は計画経済の中で生産され、平等に分配されるのが建前なわけです。しかしいまは余剰の生産物を自由市場で売買する、個人の経済活動も認めております。

中国本土でのゴルフのかえりに自由市場の一つを訪れましたが、市場に入った時ふつと昔の日本にタイムスリップしたような懐かしい気分になりました。ちょうど夕刻に近い時間でしたが、薄暗く、蠅が飛び交うお世辞にも衛生的とはいえない店先に、見たこともないような魚や大きな塊のままの肉が並べられております。建物全体は喧騒と魚や肉などの臭が混りあった独特の臭につつまれ、ちょうど子供の頃お使いで行かされたマーケットや市場を思い出しました。

現在私たちは明るいスーパーやデパートなどで、みばえよく包装された品物を買うことになれきていますが、十数年前、薄暗いマーケットで野菜や魚を買い、古新聞

紙にくるんでもらって家までだいじにかかえてきたことを懐かしく思いました。

ゴルフは期待していた THE ROYAL HONG KONG GOLF CLUB では残念ながらハーフしかプレーすることができませんでしたが、そのキャディーには感心しました。彼は（私のキャディーは男性でしたが）、私のスタートホールのプレーを見て実力を正確に評価し（要するに余り巧くないと）、次のホールから片言の英語と身振りによるクラブ選択、ショットの方向に関するアドバイスはまことに的を得たものでした。このクラブではキャディーは Senior Junior Bag carrier の三段階に分れていること、私については Junior caddy であることをあとで知りました。

対照的だったのが、前日にプレーした中国本土の ZHUIHAI INTERNATIONAL GOLF CLUB でした。そのキャディーには仕事への熱意というものが全くなく、ほんとうの意味で Bag carrier でした。中国でのゴルフの歴史が浅く、熟練したキャディーが育っていないことを差し引いても、なれない仕事を一生懸命努力しているというものではありませんでした。彼女（彼）等の体制のもとでは、仕事は与えられた量を消化すれば良いわけで、ノルマ以上の仕事をする必然性

はないのかもしれませんが。しかし共産主義体制がめざすところはすばらしいはずなのに、現在共産主義国全体が経済的に行き詰っている原因の一端を見た思いがしました。

香港は現在英国の支配下にありますが、一九九八年には中国に返還されることが決っています。社会、経済体制が大きく変貌するわけで、香港に住む人達は返還後の体制に不安を持っているようでした。香港での案内役であった KWAN LEE YUEN 女史の言葉の端々からそのことが窺えました。

当初予定していた THE ROYAL HONG KONG GOLF CLUB のプレーが旅行会社の不手際で不可能となり、我々と添乗員の間に一時険悪な緊張感が漂いましたが、女史がなんとかその間を取り持ち、帰国当日にハーフだけプレーできるよう手配をしてくれたこともあり、我々との間はかなり親密なものでした。

帰国のため飛行場に向う車の中で、まもなく現実のものとなる中国返還の話になった時、第二次大戦の時、中国共産党軍からひどい仕打ちを受け大変な苦勞をして台湾に渡ったこと、だから返還後中国は一定期間特別区として本土とは別個に扱うことを表明しているけれども絶対信用できないこと“等を強い口調で語り、最後に“私たちははじめ生みの親（中国）に見離され、

今や育ての親（英国）にも見離されようとしてゐる”と語った言葉は今でも強烈な印象として残っています。ここにはその時々
の国あるいは権力者の都合によって、資本主義と共産主義という政治体制の両極端を大きくゆれ動かさなければならぬ、香港に住む人間の感情が込められていました。

しかしその後彼女の口からでた言葉からは、香港という政治的に厳しい状況に住む人間の逞しさを感じました。既に財産は香港から他の国に移し終り、子供たちも世界各国に分散して生活の場を与えているとのことで、政治体制がどうなろうとそれにたいする対策はすでに完了しているわけで、そのしたたかさは我々の比ではないと思いました。

我々が香港へ出かけることができたのは円高のおかげですが、日本人ことに若い女性の観光客が多いのには驚きました。ひところアメリカ人がドルを懐に全世界を闊歩し、ドル垂れ流しの結果、いまや莫大な債務を抱えた老大国になりさがっているわけですが、日本も同じ道を歩む危険が十分あるような気がしてなりません。ゴルフを目的にでかけた香港旅行でしたが、帰りの飛行機の中ではゴルフの思い出の他に、様々なことを考えさせられました。

しゃしん記

撮影と文 青木 茂



香港観光初日の朝。観光バスの車窓からの第一写は曇り空の下ヨットハーバーと高層アパート群。



下車観光の第一歩はこのタイガーバムガーデン。やはりここは日本ではないナと感じた。採色を紹介できないのが残念。

レパルス・ベイの弥勒佛が歓迎の挨拶。



バスに揺られ、観光に買物に歩きまわり、辿りついた飲茶（ヤムチャ）料理店で、ワッパのセイロのワッパが山と積まれてゆく。

夕食の海鮮料理店で、旅行代理店である大友旅遊有限公司の関大成総裁／が、82才の高齢をおして来店し日本の先生各位にご挨拶。名刺には中華民国立法委員とあった。





中華人民共和国・中山縣に在る 孫文（が学んだ）記念中学校の前庭にて。

中国の農村市街地の壁に貼られた医療のポスター。



マカオに来たらここ聖ポール天主堂跡。

香港最後の夜。「新」満漢全席のフルコースの中の一品。

3日かかるコースを2時間に絞ったのが「新」コース。



お客様との記念写真用の美少女もコースの中？

帰国の朝、ロビーに集合して出発を待つ。観たし、買ったし、食べたし、満足!!



あんらいす

平凡なる平均的

開業医の軌跡

曾根 清孝

昔の開業医のパターンは大学を出て医局に入り、官公立の総合病院に送り出され、そしてその土地で開業する図式である。

私の場合も御多分にもれず東北大学の皮膚科の伊藤実教授の命により昭和二十三年五月に水野谷先生が開業なされたので、その後任として室蘭市立病院に來たのである。

そして当時の阿部病院長の仲立ちで、来蘭早々九月に見合いをして翌年四月に結婚という慌ただしい経過で、当時、市立病院の寮になっていた常盤（現在の料亭）で一間の新婚生活が始まったのである。

その頃は結核が多く、当科では腎結核が多く、よく手術したものである。ストマイがまだない時代で結核性脳膜炎を併発して困らせた。

昭和二十五年になり、志賀さんが常盤で料亭を再開されるというので寮を立ち退くことになり、住宅の問題で院長と合わず、それではと早々に開業に踏み切ったのである。結果的には二、三年で仙台に帰るつもりで來た室蘭に永住する破目になったのである。其の頃（昭和二十五年）の室蘭の開業医は三十人位で、皮膚科は水野谷先生と二人だけだった。なにしろ二十八才で開業したので、恐いもの知らずで年末の税金会議（其の頃は、開業医の税金の総枠がきてそれを医師会内で夫々の開業医に振り分けたのである）で大分、医師会長と激論を交し翌年は遂に私も税金対策委員の一員に加えられ困った事もあった。昔の良き時代でもあった。

追々、開業医の数も増えてきて昭和二十七年に親交会が発足したのだが、持ち前の反骨精神で第一回目には入会せず、三年後の第二回目にやっと入会したものである。然し其の頃の開業医は皆若くてまだまだ死など考える者もなく、親交会は仲間の親睦団体という考えから毎年一泊旅行を計画していた芸者同伴で皆んなが我が世の春を謳歌していた時代でもあった。金利は生きている間の遊びに費した時代でもあった。そのうちに浜町の織田病院（現在の大辻医院）跡を保健所が業態者の性病検診に使って

た建物を医師会が買収して医師会事務所としてしばらく使っていたが、それを売却して、後日一部の会員より物議をかもしだす一幕もあった。今ではそんな事は出来ないが当時は誰も何も言わぬおらかな時代であった。

昭和三十五年に北海道医師会が後援という形で欧米医療施設視察団を募集したのでそれに加わって四十五日間の世界一周が出來たのはワイフの英断のお蔭である。九十九万円の費用の為、薬屋への支払いを凍結して行けたのである。当時の大学からの留守番医者の日当は一日三千円であった。現在のように一日五万〜七万円も払う位なら休診して行った方がよほどよい。何しろ開業医がそんな長期間の留守は不可能である。良き時代であった。患者も保健所も、現在のようにぎすぎすせずお互いのびのびと診療が出來たのである。今の開業医は連休の時以外は長期旅行ができない。窮屈になったものである。

昭和四十年代によく医師会の会合で、会えば飲んで歩いたのは東先生である。我が青春時代の酒友である。其の頃の開業医はもう殆んどいなくなってしまった。粹月の横にあった「ローレル」や浜町のワシントン靴店の上にあった「たまき」に行つて無邪気に騒いだものである。親交会も登別、

洞爺は言うに及ばず札幌、層雲峽、函館、朝里と一泊旅行で皆さんで愉快に旅行したものである。今と違ってゴルフはごく一部の人種しかせず、親交会の旅行は始めから終り迄、皆一体となつて行動して愉快に騒いだものである。

もつと書くつもりだったが、ここまで書いたらもう飽きてしまったので筆を擱く。開業三十八年目の六十六才の男。この続編はまた後日書きます。

天和のこと

鴨井 清成

さる日、ある大人が、天和を仕出かしてお祝いにテレホンカードを戴いた。(尤も厄払いと云う人も居るが、)さて表題は何も氣象の話や、占いの話でもありません。麻雀の事です。これは親が配牌でアがる役満中最高峰の満貫手で、昔は雀荘によつては鐘を鳴らして宣伝し、御祝儀を戴いたとか、兎に角、何拾年か、何万回に一回かという手であります。

それを聞いて、F先生「僕ア、二、三回

見たよ」「夫れ誰さ」「ウン日さんさ」と云う事。H先生とは市立病院時代よりよく手合わせをしたものですが、先年亡くなられた。

ある時大人と手合わせし、天和の事を伺った。「夫れが、こうなのシヤ」と、喜色満面並べた牌は、「最後にチョンチョンと積もった牌にがあつたが、これが、

韓国研修旅行および

中国旅行記

安立 かほり

昨年は五回旅行しました。クラス会で鳥取砂丘、クラス会有志で佐渡、個人で京都、高麗夢招待でソウル、医師会で香港へ。今年には五月連休を利用して中国、七月九日東京ドームとデイズニールランド、また先日は医師会でニセコとよくまあ歩き廻ったものと我々ら驚く。つまりは晩年になり少しでも足腰のシッカリしているうちに、必死になって旅行しているみたいです。

私の弟が今年七月十九日病死しました。

私の理想の死とは、飛行機事故でアッと云う間に痛くなく然も保険金を家族に残す様な死にかたをしたいと常にも思っています、簡単に死ねるものではないと痛感しました。と申しますのはドームの帰り濃霧の為に千歳上空で二十分位旋回し、密雲の中を突込んで下降した時は流石に嫌な気持ちになり、又、ソウルに出発する前夜オニックスの社長が社員四名と共に突然夜八時成田ビュートホテルに訪ねて来られ豪華な晩餐会を開いてくださり、ワイン・ドイツビールでお別れして部屋に帰ってから、今度こそ最後かなと一寸不安になりました。私って口

と腹とは違うらしいと思わず苦笑した次第です。

韓国旅行は昨年九月九日から十三日迄北海道から七人が招待を受け出発、成田空港に着いた所あまりの人数にビックリ、成程マイケルジャクソン来日の為と判り時代を感じました。十日大韓航空に乗る、気のせいか最初から遅れる、十二時金浦空港着。ここで福岡・東京・大阪組の先生方と合流総勢一七〇名となりバス五台に分乗、我々北海道は東北・沖縄と共にB組で一番人数が少く市内観光に向う。(ガイドの説明を記憶を辿って記しますので間違いがあれば御容赦下さい。)

漢江という巾広い川に鉄橋が沢山かかりこの鉄橋が出来てからソウル市の地価が急上昇したとの事。六十三階の建物が現在では一番高層と聞きました。土地が少なく又地震がない為高層アパート・マンションビルがギッシリ建ち並び、ソウルはまさに躍進の槌音が響きわたっている様肌で感じられました。

日本は経済大国と言われドッカーアグラをかいていいのだろうか、我國の将来に対してヒシヒシと迫る不安を禁じ得ないのは私一人の思い過ごしであってほしい。

ガイドの説明は続く。我國の車は凡べて韓国製であり日本車は七年前から一台もな

く逆にドンドン輸出していると鼻息も荒い。グリーンの営業車は一番料金が安く、グリーのアンテナ付営業車が一番高くて二kmにつき千ウォンだそうです。

国立中央博物館は四階建、沢山の青磁の壺の前でガイドの声が一段と高く、このトロリとした色調はこの国独得のもので日本では到底出せない為美濃焼とか有田焼になったとか、また韓国のハングル文学は母音十二、子音十二の二十四文字で凡べてが判る。日本語は五十一文字の他漢字があり複雑過ぎる。我々の学者は簡易にして総てに通ずる文字を研究した、全く素晴らしいと言葉のアチコチに露骨な感情が現われて些かムツとしたものです。

九月十一日ホテルから一路人蔭畑に向う。六年物の白い人蔭は貴重で今年は余り良い出来ではないそうで成程小さいと思います。最良の人蔭の姿は写真の通り人体そのままで、頭・体・手・足と形よく出来たのが一番との事。畑のスケールは思ったより小さいと感じました。人蔭片手に写真は撮らせてくれますが人蔭は一本も呉れないケチ!!それからウォーカーホテルに向い四時よりサンフラワーホテルで学術講演会が始まりました。その後七時より専売公社社長主催レセプションが始まり、仲々重みがあり、礼儀正しくロングドレスに着替えて

よかったと安堵した次第です。それから後はカジノで遊んで結局二千円の損、絶対に儲からないものだと思惑しました。

九月十二日、専売公社扶余高麗人蔘廠見学。実に広々とした工場内で流れ作業で女工達の人蔘選別・洗浄等整然と行われていました。庭に出て工場長の挨拶があり人品豊かで日本人的風貌の工場長は、日韓の諸問題の沢山ある中でようこそと心からの歓迎の言葉があり労使問題の過渡期を過ぎればこれからは前進すると結ばれました。こういう暖かい人もいるのかと彼と握手し大きな喜びを感じました。

庭で人蔘エキスを三杯も飲む。疲れが取れた感じ。冷・熱・ナツメ入り等全部試飲しましたが、コージンよりずっと口に合いました。

午後から百済の古都扶余の古蹟観光に向う。李石浩氏の説明あり、暑いのに長い話だった。要するに人蔘は、日本では長野県でも作っているが土が問題であり、我国のは黄色い土でこれから全栄養を貰って出来たものだから最良のものです、人間も同じで白色も黒色も駄目で黄色人種が一番優秀だと笑いを誘って終わりました。

夜、シアターレストランで素晴らしい韓国舞踊とフランス人のアイスショーと次々に展開する美観に酔う。一番前の席を我々

で占め、実に美しく本場アリランの唄を聞き、よく歌っていた亡き主人を想い起しました。

十三日はやくも帰宅の日で、五時モーニングコールで起こされ、連日の早朝出発と夜はいつも十時過ぎの帰着で極度の疲労鬱積でしたけれど、最終日ともなれば落伍も出来ず足に豆を作りながら体力消耗を何とか喰止めた私の生命力の強さにつくづく驚き入った次第です。

飛行機は又落ちもせず、躍動のソウルを後に静寂の千歳空港に四時半無事到着しました。

中国旅行は今年五月の連休を利用し、憧れの中国は桂林・北京・上海の旅に出ました。

先づ上海到着後ホテルまでのバスの中で添乗員季さんの流暢な日本語の説明で、上海は経済の中心地で貿易センターであり、アパートは皆国営で家賃は給料の5%、例えば百元なら五元―約百円―との事。人口は一、二〇〇万人、車は左側通行で、目立つ鮮やかな緑色の制服は軍人で、渋い緑色は警察官とのこと。旅順公園での印象は人々の顔が皆のどかで実に柔和善良な市民という感じそして女性はビクリする位美人が多い。一時半中国民航機で桂林に向う為に乗ったバス数台は全部日本人だという事に

何か一抹の哀れを感じました。

桂林着と同時に山また山が迫り、折からの曇天で霞んだ山はまるで墨絵の様に見事晴天の桂林は何の魅力もないと聞いておりましたので誠に恵まれたと嬉しくなりました。

朝九時桂林ホテル出発、雨に煙る絶景の漓江下りとなりました。けれど船内の硬い椅子での三時間は如何に絶景でも少々辛い。種々の御馳走と一緒に小さな南京豆が出ましたが余り小さくて可愛いので思わず小さいわねと言ったら、ガイドの訥さんが即座に化学肥料が足りないせいでしょうと答えられ啞然としました。船外に目をやると巨大な様々な形の山が迫る。スコールあり、霧雨ありベールをかぶった山肌が柔らかく、また突然荒々しい山肌が茶褐色の表面を濃い緑の樹々の間から見せ、時に薄日が射して一幅の絵を見るかのように私の心の中にこの絵は焼きついて離れない。

五月四日朝、北京行きの飛行機に乗る為出発、所が好天なのに仲々飛ばない。結局丸一日潰れて午後六時機上の人となる。従って最後の上海観光はお流れ、これで良いのかと腹立たしくなりました。日本ではあり得ない事、北京は人口一千万人で中心地に五百万、周辺より四百万、地方から来る人百万人とか。子供は法律で一人しか産め

ないのに人・人・人、自転車のラッシュ、
どうしてこんなに大勢の人がいるのか流石
大陸だと驚く。北京の気候は九月・十
月が一番良い頃で、春は風が強く冬は氷点
下四度〜五度くらい、ソ連からのマイナス
四十度の風の為に寒いそうです。

五月五日北京郊外を走り万里の長城に向
う。バスの中から安立路という地名を見て
ビックリしました。万里の長城は道幅が広
くシッカリした緩やかな階段が延々と続き、
暑い上に人の熱気で息苦しく壁の所々に大
きくなり抜きがありここからの強風で救わ
れた感じ。私は頂上を極める事を断念し、
大自然を充分満喫したので下降しました。

古い歴史の国だけに天安門・魯迅の墓・
故宮等々とても書ききれません。一度は見
聞の価値ありと思います。

最後に感じた事は、漓江下りの船内で乾
さんの話の中に今の中国の姿を見た様な気
がしました。

共産主義なるが故に資本主義とは違い国
の発展性が無い。今の中国の若い人達は、
皆疑問を持っているし改革しようとしてい
る、ソ連も同じ考えだと結ばれた。これ等
の話はなるほどと頷けるけれど、額面通り
に受取って良いかどうか疑問を感じました。
「いやあ旅行とは苦しくもあり又、楽し
いものです」



昭和63年親交会旅行

ニセコ・積丹方面 7月16・17日

ニセコ東山プリンスホテル泊

幹事の弁

斉藤 修 弥

今年の親交会親睦旅行はニセコ・積丹観
光旅行であった。一行23名の少数精鋭によ
り1泊2日の楽しい旅行であったが、万年
幹事を務める小生として反省することも少
なからず認められることから、今回の旅行
のスケッチをおりませながら、親交会旅行
のポイントを率直に披瀝したいと思う。

旅行の最初の難関は行先地をどこに決め
るかである。昨年は香港大旅行であったの
でその機会が無かったように記憶している
が、通常は旅行の帰りのバスの中でアンケ
ートが行われる。アンケートを募ると多様
な希望が集中し、それを幹事が集約してほ
ぼ5〜6年周期に近辺の行楽地を選定する
ことになっている。これには1泊2日の時
間的制約が大きな要素となっている。今年
は兎に角質素にいかうという行事委員会の
結論でニセコ・積丹方面に決ったわけであ
る。

次なる問題はどこの旅行社に依託するか
である。昨年まで依託していたA旅行社は
例年少なからぬミスを犯し、先生方の不評
をかいつつも来年は良くやります、やって

くれるだろうという甘い関係を長年にわたって続けてきたが、昨年の香港大旅行で決定的なミスを生じたため今年は異論なしにB旅行社に依託した。驚いたことにB旅行社の室蘭支店長が、張りきって添乗員として乗りこんできた。そのサービス精神たるや誠に天晴れなもので、スケジュールになりニセコ山登り観光や積丹・余市観光を盛りこむなど、まるで最初から裏スケジュールとして用意していたのではないかと疑うほど見事なものであった。矢張り時には馬を牛に乗り換える必要があると痛感した次第である。

旅行の3番目の難問は人員の確保である。このために幹事は細心の注意を払っている。例年旅行実施日は7月初旬のためゴールデンウィーク明けに足止めの予告案内・親交会総会に於いてのPR、そして募集と続くわけである。例年この段階では余り人数が集まらない。そこでつてを求めて個人勧誘が続く。その結果大体バス一杯位の人数が6月下旬に決定しホッとするわけである。ところが実際の悩みはこれから始まるのが通例である。予約取り消し・急用・病氣・患者さんの急変などあらゆる天変地異が出現し、実際にバスに乗り込む姿を見るまでは心を許すわけにはいかない。ちなみに今年の最初の申し込みは30名、最終乗車数は

23名であった。

バスが動き出すとしばらくはのんびりしていられる。添乗員やバスガイドが飲みもの・食べ物サービスの努めるので車内のトラブルはまず発生しない。今回もとても楽しいビールパーティがニセコまで続き、久し振りの好天の下、明るい笑声がこだましていた。

宿舎のホテルに着くと、またふんどしをしめ直さねばと考えてしまふ。部屋がきれい、宴会場の雰囲気はどうかと気にかかると、最大の懸念は宴会の料理である。旅行社と何回となく打ち合わせをするが、毒見までは出来ないため口の肥えた先生方の口に合うか、ボリユームは間に合うかと一番気をつかうシーンである。札幌や函館など大都会ではまだ口直しの場があるから救われるが、今年のような山の中ではリカバリは不可能である。その点今年はボリユームは少ないが味はまずまずの出来で一安心した。

宴会は酒だけ飲めば良いものではない。1年に1回のお楽しみ旅行なので、盛り上がりを考えなければならぬ。それには女性が一番うけるわけだが、値切って準備するとやぶへびになり頭が痛いところだ。今年はホテルボーイのサービスだったのでもなく、不可もなしの平均点で通過したよ

うだ。宴会は最高潮の時点で打ち切るのが上手いやり方だと云われている。しかしながらこれは普通の宴会の話で、親交会旅行となると二次会その他の準備を伴う話で簡単にはいかない。最近では難かしく考えず小さいところを1個処だけ設定することにした。行くも行かずも御随意にと説明するとうまくしたもので、三々伍々集まっては去り、また集まるという具合でこの方式が良いのではないかと思っている。その他あげればきりが無い。麻雀卓の手配から、ボーイ・女中の態度について、ウイスキーの氷・グラスが足りない、夜中に腹がすいたなどホテルフロントまがいの注文が夜更けに向けて殺到する。今年のニセコは例年になく苦情が少なかったが、俗界をはなれた神秘的な高原の夜がもたらした影響かもしれない。一夜明ければほとんど問題は生じない。ゴルフと観光に分れて昨夜とは違って変って口数も少なく、夫々の趣味を堪能するのが恒例である。

今年も好天に恵まれて両者とも好評であった。改めて親交会旅行の意義など論ずるつもりはないが、帰りのバスの雰囲気は気分知れた家族旅行のようでもっと心地良い。お互いの人間味をけれんなく見せあったふれ合いの効果ではないかと思われる。それがやみつきとなり、常連のグループを形成

していくと思われるが、小生の夢はバスを2台つらねてくり出す大親交会旅行の実現である。1泊2日のユートピアへ、来年は更に多数の参加をお待ちしています。

ゴルフ・コンペ

石川 秀人

殆ど晴れに近い曇りノ

心配された前日からの天候も回復し、いよいよここニセコゴルフコースでのラウンドである。当然コンペ、スコアの争い（口の争いもあるが）である。

私を含め他の7名、森田益幸、鴨井清一、鴨井清成、斎藤修弥、皆川芳徳、畠山正照、斎藤光史の諸氏も殆ど初めてである。

前日の宿泊はニセコ東山プリンスホテル。

羊蹄山、ニセコ連峰にかこまれ、都会から程良くなれ、空気がおいしく、オールシーズンでリフレッシュできるところである。ヤングギャルがとりわけ多いのが特に嬉しい。食事もおいしく、夜も当然静かである（登別の自宅では、右は車の騒音、左は汽車の騒音に悩まされながら眠るのは大変な差である）。ベッドに入ったとたん、もう朝ノ。さあいよいよ今日は待ちに待ったコンペである。前日の盛り上った宴会もは

やく切り上げたし、露天風呂での化粧ガラス越しに見えるヤングギャルたちのシルエツト観賞も早めに切り上げたし、何か月ぶりで食べた朝食もうまかったし、当然ねらうのである。

7時20分に出発したバスは15分でゴルフ場へ到着。クラブハウスは木目が美しく、西武系特有の作りで閑静で森とよくマッチしている。コースの設計は、かの有名なアーノルド・パーマーである。白樺と松と池にかこまれた難しそうなコースである。

ここで観光組と別れ、着替えも早々にすませパットの練習に入る。皆もうすでにやっている。ねらっているな、フムノ。ニセコ山系の土は乾いていて下が硬い、これも硬そうである。各ホールの状況は全くわからないが芝の状態は良さそうである。総勢8名、2組に分かれていよいよスタートである。運を天にまかせて。

No1、三七二Y、M。左ドッグ、一打はやや打ち上げてショートすると二打はグリーンがみえない。手前が狭くなっていて左が深く落ち込んでいる。諸氏左右に打ち分けるも出足は何とかうまく切り抜ける。

No2、一六五Y、S。打ち下ろしで距離感がわからない。グリーンはやや大きく逆三角形をしていてうねっている。ピンは右中央。ここも4人とも左右にぶれてしまう。

皆寄せがうまい。

No3、四九八Y、L。フラット、フェアウェイはうねっている。二打地点からグリーンは殆ど見えない、手前にバンカーが待ち受けている。当然三打目が難しく、バンカー奥の砲台グリーンは横に長く左へ傾斜し左の狭く低いほうにピンがある、難しくしてある。諸氏奥のラフや右の奥上へつけてしまう。案の定スリーパット。一打目二打目と良かったのに、おしい、つめがあまり。No4、三八九Y、M。林に囲まれた池越え。フェアウェイは凹凸が多く距離がある。皆プレッシャー掛け合う。ティショット、池一人、右の林一人、引っかけ二人、ハハハ。二打でも距離があり、予想通りグリーン手前のバンカー入り。ウーン。グリーンが早い上奥が低く越えたと下へ落としてしまう。ショート。No5、一九〇Y、S。右手前に池。グリーンは大きく中央が低くピンは真ん中にある。近く見える。風は左からで風力2、池が呼んでいる気がする。2番手、思った通り風の計算があまく私も池へ吸い込まれる。素直である。No6、三三二Y、M。ひどい打ち上げ、まるでスキー場。グリーン手前にバンカーが多く、段々畑に見える。ピンの旗が見えないし、目が錯覚してしまう。大きなクラブを使わないと。ひえー苦労したノ。No7、四二〇

Y、M。ハンディキャップ1。ひどい打ちおろしで距離があり、左右は林で狭い。おもい切つて打つも意外とキャリーもランもない。一人は左の林へOB。二打はクリーク越えて距離があり、しかも左下がり、案の定トップしクリークにつかまる。皆仲良く大たたき。No 9、四八三Y、L。ティショットは前組のレディーと同じ飛距離、ガツカリしながらも何とかハーフ終了す。やはり下が硬く、ラフは粗で粘りがないが深く平坦な所が少ない、少しはなれると下へ落ち込んでいる、いわゆる馬の背である。満足感が全くない、酒が足りなかったのかなあ。足よりも重くインに向かう。後半頑張るぞー。

No 10、三三九Y、M。左ドッグ、打ちおろしのクリーク越えて左に大きな池。がつかりしたせいか右へ大きくふけてしまった、あーあ。ラフからえらく打ちにくかった。No 13、二〇六Y、S。池越え。グリーンはおおきく、ピンは左端。近く見える。一打は左へ大きく飛び越してしまった。皆距離感が悪い、付き合いが良いのである。No 17、一七七Y、S。高低差36mの極端な打ちおろし、ジャンプ台の上から見ているようである。しかも悪いことに第2組が追い付いてしまった。彼らもおなじく苦労しているようである、ウンウン。一人だけニコニコ

している、彼が一番良さそうである。さあ一打目、クラブ選択が難しい。オーナー、周囲からのプレッシャー口撃をよそに歯切れ良く打つ。アレーノ左へ大きく飛び越してしまった。皆直ぐにクラブを小さくする。しかし左右へ飛び散ってしまった。私もあぶなく崖へ落ちそうになった。地面が硬いんだよノ最後の一人、チョロツて崖を真すぐかけおりグリーン中央へコロコロポトンノナイスオンノヤンヤの拍手喝采。これが一番正解かあー。第2組も似たようなものであった。ヤレヤレ。

No 18、三一一Y、M。最終ホール、左ドッグレッグも皆気持ち良くパーで上がり、アップダウンが多少きつかったが何とかゴルフをやった気分になった。

優勝は斎藤光史氏。ネット72、パープレイ、立派ノ拍手ノ二位に三打差つけて優勝賞品、及び連複もさう。コノーノ何の事か。ま、天気もよかつたし、コースもよかつたし、この親交会のゴルフはいつもながら楽しいのである。次回に御期待ノけども少し長く風呂に入っていれば良かった。

編集室へのお便り

大部寒くなりました。御地はもう雪の頃と存じます。

本日は「波久鳥」を御送り下され有難く拝見致しました。小生の拙文をのせて頂き赤面の至りです。昔の写真なぞなつかしく本当に有難う御座居ました。

厚く御礼申し上げます。

日立市大久保町一の三

稲葉 真
(62・12・18)

拝啓

本年も残すところ僅かとなりましたが、御機嫌よろしくお越しの事と拝察致します。さて波久鳥記念号拝読致しました。号を追って充実を加へる事はまことに御同慶の至りです。

折角の記念号に拙稿を御載せ下され、聊かならず或は御期待に背いた事と汗顔の極みです。

しかしながら、会長の挨拶、座談会、稲葉氏、小生との四部合奏により会の歩みが

闡明された事と存じます。

会長が親交会の将来に就いての御抱負を述べて居りましたが、今は部外者の小生が云々する事は、はばかり多い事です、不日百尺竿頭一步を進める時が来る事と思ひます。おみごとな脱皮の姿を期待申し上げます。

それにいたしましても、会誌を通読いたしますと貴会はまだことに多士済々、親交会の為に喜ばしい限りです。もつて会の将来が窺い知らるる事でしょう。

貴台を初めといたしまして会員諸氏の御幸福と会の発展を祈念致しまして御禮の言葉といたします。折ある毎に諸兄によりしく御伝言の程を

市川市柏井町一ノ一七九一

草々

長田 廣

(62・12・26)

寒さなお厳しうございます。その後は皆様御清祥のことと存じ上げます。

この度は親交会々誌「波久鳥」第8号を御送り下さいまして誠に有難うございます。皆様の御活躍をお伺い致し、大変懐かしく存じます。私も今年度まで静岡県医師会の勤務医部会幹事を勤め、元気で過しております。貴会の御発展を御祈り申し上げます。

草々

静岡県田方郡中伊豆町上白岩一〇〇〇

中伊豆温泉病院 齊藤 幾久次郎

(63・2・24)

前略

あと余す処数日で今年も終ります。

過日、「波久鳥」第8号をお送り頂き有難うございました。室蘭を離れてから未だ一年半ですが、とてもなつかしく拝読させて頂きました。

当地函館は以前に親交会の旅行で二度程訪ねた事がありました、住んでみて割合に暮し易い所です。不景気の北海道の中では、歴史が古く底力を持っています比較的活気があります。でも医師会の世帯は大きく、役人をやっていたのではとても室蘭の医師会に所属していた時のような交流や、親交会の如き和やかな雰囲気に入る機会はありません。

東町の旧医院も処分出来ず残って居り、定年を過ぎたら永住の地は再び室蘭とも考えて居りますので、それまで諸先生方のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

敬具

函館市海岸町二四ノ四

函館検疫所

山本 健三郎

(62・12・24)

此の度は「波久鳥」御送りいただき有難うございました。皆様方の御活躍の模様手にとるようで大変なつかしく思っております。

日本の代表的不況地と云われる室蘭ですが必ずや近き将来再び繁栄の時が来るものと信じております。

静岡市大谷三八〇〇—九二

一方井 卓四郎

(62・12・24)

87年の年もあと残すところ幾日もなくなりました。

諸先生お方々には御変りなく益々御発展の御様子陰ながらお喜び申し上げております。扱本日は波久鳥をお送り頂き誠に有難うございます。厚く御禮申し上げます。毎号御送り頂く度に御禮をと思い乍ら、先にたつものは悪筆悪文でございますので失禮致しりましたが、この度は思いきつて御禮迄書きましたので何卒御笑覧の程お願い申し上げます。毎号諸先生御方々のお作を楽しく拝読させて頂いております。

先づは厚く御禮迄。

これで失禮させて頂きます。

かしこ

函館市五稜郭町20—15

古河 富美
(62・12・19)

愈々押迫つて参りました。
皆々様おすこやかに御すごしの御事と御喜び申し上げます。

日頃は御無沙汰に打過ぎ申訳なく存じ居ります。此の度「波久鳥」御恵送下さり有難く御禮申し上げます。主人亡き後まで御心遣い頂き感謝申し上げます。早速ページをめくり写真を見、先生方の御一人御一人のお姿が走馬灯の様に浮かび、室蘭時代がなつかしく想いおこされます。お寒さの折御自愛御專一に。御禮まで、かしこ

水戸市千波町三九五―二

松岡 志げ子
(62・12・21)

今日は冬至・今年もあと十日足らずで終りですが、一向御無沙汰ばかりで恐縮に存じます。室蘭医師会の諸先生にはお変わりなく御健在で御活躍中と推察致し、同慶至極に存じます。

此度は又「波久鳥」第八号を送って頂き御厚意に甘え有難く受取りました。早速読んで居りますが長田先生の「思い出の藻汐草」や「親交三十五年の座談会」を特にな

つかしく、諸先生の顔を思い浮かべながら読みました。

今年の元日には思いがけない大岩先生が房総半島旅行中わざわざ寄って下さって諸先生の消息を詳しくお話し頂き、この上無い嬉しい再会でした。家内が亡くなってから早や四ヶ月が過ぎ去る十一月二十六日が百ヶ日に当りましたので、ささやかな祈禱追悼式を無事終了しましたので、気持ちも漸く落着いて参り独り暮しの寂しさにも次第に慣れて変りなく仕事も続けて居ります。

去る十七日、千倉に住んで二十五年で初めて経験した大地震でびっくりしましたが南房州の当地方では幸い何の被害もありませんでした。例年より早い冬の到来で寒さも殊の外きびしいようですから、諸先生には呉々も御自愛下さってお元気でよい新年をお迎え下さい。

一筆乱筆で受取りの御礼を申し上げます。
千葉県千倉町瀬戸二三六〇

高橋 清藏
(62・12・23)

街にはイルミネーションも輝き華やかに新春を迎えようとして居ります。

今年も亦「波久鳥」をお送り下さりありがとうございます。号を重ねる毎の充実うれしいことでございます。

諸先生方のますますの御発展と御健勝を念じつつ御礼まで申し上げます。

かしこ

札幌市北区新琴似七条二丁目一―二〇―
二一六 木谷 静子

其の外、北大附属病院登別分院 阿岸祐幸様、日鋼記念病院 西村昭男様、市立室蘭図書館様、登別市立図書館様から礼状を頂戴していますが文面は省略させていただきます。

編集室



会 員 異 動

昭和62. 10～63. 9

年 月	事由	氏 名	備	考
62. 11	入 会	高 田 芳 朗	室蘭市知利別町 1—45	新日鉄室蘭製鉄所病院
62. 11	入 会	古 賀 健一郎	室蘭市知利別町 1—45	新日鉄室蘭製鉄所病院
62. 11	入 会	足 永 武	室蘭市知利別町 1—45	新日鉄室蘭製鉄所病院
63. 1	入 会	柳 川 志 公	室蘭市高砂町 5—7	柳川内科医院
63. 1	入 会	斉 藤甲斐之助	登別市若草町 4—24	若草内科クリニック
63. 1	入 会	斉 藤 美知子	登別市若草町 4—24	若草内科クリニック
63. 9	退 会	吉 原 晴	登別市登別本町 2—3	

編 集 後 記

昭和55年の波久鳥創刊以来、編集委員会事務局として委員の末席に加えられ、本号までの九年間お手伝いさせて頂きました。主な役目は座談会や委員会の準備や配本・会計などでしたが、今秋医師会を退職するに際して編集の大久保先生から最後の仕事として編集後記を書く様要請されました。もとよりその任に非ずと思いましたが在任中の思い出でよいからとの事なので、いつもの断わり下手からこんな破目になりました。九年間の思い出といえいろいろありますが、恒例の座談会では録音を担当するのですが時には話題に引き込まれてテープの入替えを暫らく忘れ、それでも毎号の座談会にご存知の通りの出来映えで、まとめ役の加藤先生には全く頭の下がる思いです。昨年は創立35周年の記念として、ここいらで全会員の一貫した名簿を作っておこうとてその作業に入りましたが、困ったことに創立時の判つてもその後十数年の分は入退会についての判然たる資料がなくて、仕方なく各年度の会計記録を探し出して積立金の支払額から入会時期を推定したり等々あまり公表したくない作業を重ねた結果、

一応かなりの精度をもった「親交会在籍者一覧」を仕上げて後代に引継ぎできるものを波久鳥第八号に載せる事ができました。

第九号も例年通りフルコースの内容で、手際のよい編集に誘われて一気に読了されたのではないでしょうか。中でも第五号から第八号と本号に続く「心拍停止と人間の死」に論及されている高橋先生のお説には、半部外者として深い興味を抱かせて貰いましたし、「奥州かくれキリシタン考」の終章に於ける古典と交響楽の比喩の文章と、架空対談「孔子様と音楽を語る」の中で孔子の説く「楽」の真髄に関わる文章とが、期せずしてこの第九号の中で顔を合わせた事が何かの偶然なのか因縁なのか、面白いものだなと思えました。又毎度ながら当方のお願いに快く玉稿をお寄せ下さった諸先生に厚くお礼申し上げる次第です。

終りにこの欄をお借りして第十号以後の波久鳥の力強い飛翔と、元・現会員諸先生の益々の御健勝を祈り、併せて永い間の御支援に心からお礼申し上げまして役目を終らせて頂きます。有難うございました。

(事務局・青木記)

「波久鳥」九号編集委員

青	大	三	神	遠	児	澤	村	加
木	久	村	島	藤	玉	山	井	藤
	保	博		秀	直		么	治
茂	平	通	章	雄	彦	豊	乙	良

室蘭市医師会事務長・「波久鳥」編集委員 青木 茂氏が昭和六十三年九月三十日に退職されました。
創刊以来、本号に到るまで編集、配本、経理と数多くの仕事をして頂きました。
長い間、大変お世話になりました事を誌上を借りて厚く御礼申し上げます。

大久保 記

親交会誌 波 久 鳥

発行日 昭和六十三年十二月五日
発行所 室蘭市医師親交会
印刷所 室蘭印刷株式会社